

被爆者

阿部静子は語る

―悲しみに苦しみに 生きていてよかった

阿部静子＋「ヒロシマ通信」研究会

出版に当たり

このたび、私のことを本にしてくださいました。九七歳の消えかかる記憶を呼び覚まして出版してくださいました。ひとかたならぬお世話になりました。

思い返せば、若くして被爆して大切な顔に残り、女性として人知れず苦しみました。原爆では、人々が百人百色の苦労をさせられて来ました。初歩的な原爆ですら、大変な悲しみを与えました。これがこの世の出来事かと思う地獄を見ました。

現在の強力な核兵器が使われたら、広島・長崎の比ではありません。ある外国の学者のシミュレーションでは、東京の中心部に一発の核爆弾が投下されると、死者は推定約一一〇〇万人を超すそうです。広島 of 死者は昭和二〇（一九四五）年八月六日から年末までに約一四万人に上ったといわれています。それでもこれ

がこの世の出来事だろうかと思う惨状でして、一生苦しむ傷を受け、家族ともども悲しい一生を過ごさねばなりませんでした。

人間誰しも人さまの苦しい悲しい話は、心が痛み聞きたくないものです。ですが、私どもの体験が今繰り返されようとしている恐れが高まっています。原子爆弾に泣いた私が皆さまに声を大にして申し上げます。

決して決して今の世で核兵器を使用してはなりません。核兵器を持っているから安心安全ではありません。使用されれば人類は滅亡です。使ってならないものなら廃絶しかありません。原爆の被害に一生苦しんだ被爆者の心からの願いです。

阿部 静子

【凡例】

- ・阿部静子の証言は、二〇二四年五月一日から一〇月二日にかけて計一三回、阿部が暮らす「広島八景園」（広島市南区の介護付き有料老人ホーム）の自室で行われた。一〇月一七日に追加の聞き取りをした。―は編者の問いを示す。
- ・阿部の「広島・長崎世界平和巡礼」に関する日記・書簡の引用は原文のままとしたが、適宜、句読点を補った。「／」は引用での省略を示す。
- ・編者による注記は（ ）でくくって本文に挿入した。証言に関連する人物や出来事の説明を別項で記し、広島平和記念資料館は本文中では一般に広く使われている原爆資料館とした。
- ・掲載写真は、クレジット明記がないものは阿部や家族の提供である。
- ・証言の関連事項を中心に「阿部静子略年譜」を付した。家族の没年は提供の記録や墓誌で確認し、享年は満年齢で記した。
- ・「あとがき」を付し、本書の作成に至る経緯などを記した。

表紙写真…阿部静子 2024年8月6日 浜岡学撮影

〈目次〉

出版に当たり	3
はじめに	7
1 原爆被爆	9
2 悲しみに苦しみに	31
3 冷戦下の世界平和巡礼	75
4 被爆体験証言者	131
5 生きていてよかった	157
阿部静子略年譜	178
あとがき	199

はじめに

阿部静子は、今日に続く被爆者の訴えや活動の礎をつくった一人である。

一九四五年八月六日史上初の原爆にさらされ、米軍主導の日本占領統治が明けた五二年、いばらの道を強いられていた被爆者の集まりに参加し、体験記も表す。そして五六年、被爆者による初の「国会請願」から広島県原爆被害者団体協議会、続く日本原水爆被害者団体協議会の結成大会に参画する。

東西冷戦下の一九六四年には「広島・長崎世界平和巡礼団」として全米各地で自らの体験や思いを伝え、欧州や旧ソ連も回った。八〇年代からは被爆体験の証言活動を続け、修学旅行生のみならず各国元首や軍縮担当者らに核兵器廃絶、戦争のない世界を訴えた。

原爆が人間の頭上でさく裂した「ヒロシマ史」をまさに生き抜いてきた。被爆八〇年を控え、阿部の歩みをあらためてつぶさに尋ね、語っていただく。二〇二五年二月二二日に満九八歳を迎える。

1 原爆被爆



1943 年 12 月ごろ、阿部三郎と静子の婚礼写真。新郎は 25 歳、新婦は 16 歳だった。夫の軍務復帰で新婚生活は約 1 週間にとどまり、再会は 1945 年末となった。

一八歳だった。阿部静子は、広島市へ原爆を米軍が史上初めて投下した一九四五年八月六日、さく裂直下の爆心地から南東約一・五_{キロ}で被爆する。前日の日曜晩に聞いた求めから市中心街近くに出ていた。

私は原爆の頃は、安芸郡中野村（広島市安芸区）の砂走に家を借りて、主人の母と二人で暮らしていました。実家がある奥海田村（安芸郡海田町）砂走との村境で、米や味噌^{みそ}などを扱う雑貨屋さんの離れでした。

阿部三郎と昭和一八（一九四三）年の暮れ頃に見合い結婚し、主人は一週間後に、満州牡丹江省（中国黒竜江省）に駐屯していた部隊（第八師団野砲兵第八連隊第九中隊）へ戻りました。九つ年上です。満州に春が来れば、お姑^{しゅうとめ}さん（三郎の母ナエ。一八九一年生まれ）と向こうへ渡るはずでしたが、戦況が悪くなり無理でした。姑さんは、もともと天応町（現在は呉市）の出でしたが大阪で長

年暮らし、お花を教えていたそうです。戦争中ですから遊んではおられません。

しょう

私は海軍の工場（第一一海軍航空廠）へ勤めに出ました。今の海田中学校がある所です。工場長は実家、だいき大力の親戚の方でした。秘書のような仕事をして、空襲警報が発令されると、メガホンで工場中へ私が伝えておりました。

広島市の建物疎開作業へ出ることになったのは、あの頃こう呼んでいた「隣組・隣保班」との関係からです（政府内務省は一九四〇年、町内会の下位に「隣組」を組織化し、食糧などの配給切符を割り当て、組員同士の監視も促した）。

八月五日晩の常会で、班長さんが中野村役場の命令を受けて、「この砂走から建物疎開へ何人を出しなさい」と言われました。姑さんと女二人の世帯ですから（ガソリン不足で松の古株を掘って炭焼き窯で乾留する）松根油を何貫目出せとか、馬の餌となる干し草を出せとかの命令も全然できていない。近所の方が私らのできない分まで補って、「隣組」の務めを果たしてくださっていた。後ろめたく、小

さくなつて暮らしておりました。そこへ広島での建物疎開作業へ出動の話があり、私は奉公ができるならと手をすぐ挙げたわけです。

帰つて姑さんに、今日の常会はどうこうでしたと話したら、「うちは三郎を国へささげとる。あんたがそんなことで行くことはない」ときつぱりと反対されました。しかし、申しましたように平素いろいろ申し訳ない気持ちでおりましたから、行かせてもらいました。勤めていた軍需工場へは前の晩、急に決めたことなので連絡しようがなく無断欠勤でした。

翌六日は、早朝に山陽本線の安芸中野駅に集合しました。集落からは一番若い私を入れて五、六人だったでしょうか、全体ではもつといました。私は半袖のブラウスを着て、紺の生地でできたつりズボンをはき、自分で縫った帽子をかぶっておりまして。弁当は持つて出ましたが、水筒は忘れていましたね（中野村などが戦後合併して誕生した『瀬野川町史』Ⅱ一九八〇年発行Ⅱによると、村からは

七五人が出動した）。

あの頃の汽車は走ってもすぐゆっくり、午前七時前には安芸中野駅から乗ったと思います（国立国会図書館所蔵の一九四五年一月改正『時刻表』によると、広島駅までは遅延がなければ二三分かかっていた）。

広島駅に降りると、村役場の人が先導して南へ歩きました。言われるがまま着いた先が、平塚町（現在の中区東平塚町や西平塚町、鶴見町などの一帯）です。女学校（西白島町の安田高等女学校）の頃は、安芸中野駅から広島市内へ列車通学していましたが、街中へはたまに福屋百貨店へ行くくらい。平塚町は全く来たことがない、知らない町でした。私どもの作業現場は、京橋川沿いの西側、鶴見橋の西詰め近くだったと思います。

壊す家屋の庭に木陰があり、弁当や防空頭巾などを収めた荷物袋をそこに置き、一緒に行ったお年寄りの方が見張りをして、作業を始めました。

私は若いから命じられて屋根に上がりました。命令には何でも聞かにやあいけん時代でしたからね。辺りには、大勢の男子・女子中学生がいましたが、交ざることはありません。中野村の人たちと組み、瓦を二枚ずつ重ねては下へ下へと渡していったんです。戦争中ですから瓦も貴重な資材でした。

広島市の建物疎開は政府が前年十一月に指示し、一九四五年に入ると本格化する。第六次の疎開作業では、米軍の空襲に備える「避難広場・道路」を京橋川沿いに面する鶴見町や、市役所東側の雑魚場町、本川に接する中島町などに設けるため、各郡内からを含む国民義勇隊や学徒隊の大量投入が八月三日に始まり、義勇隊約三万人、学徒隊一万五〇〇〇人が動員される（一九八八年発行『広島県戦災誌』など）。

八月六日午前八時一五分、鶴見橋付近には、広島市内でいえば尾長町や荒神町

などから、郡部は安芸郡中野村や同坂村の国民義勇隊、県立広島一中三年生、広島女子商や広島中の各一・二年生らの学徒隊が出ていた。

平屋の屋根に上がっていましたが、近づく飛行機（原爆投下B 29爆撃機「エノラ・ゲイ」や随行二機）のエンジン音も姿にも全く気づきませんでした。

ピカッと光ったのは覚えていません。気がついたら、屋根から吹き飛ばされ地面にたたきつけられて、やけどをしていました。周りは薄暗くなっていて、何か嫌な臭い、人間を焼く臭いが漂ってありました。それまで何分たっていたのかは分かりません。気を失っていたのだと思います。

やけどは右半身がひどい。原爆が爆発した方（爆心地の細工町Ⅱ現中区大手町一丁目Ⅱの上空、高度約六〇〇メートル）へ向かっていたんだと思います。瓦を持っておりましたから手のひらも焼けていました。半袖のブラウスは右側が焼けてバラ

バラでした。黒に近い紺色のズボンは、足の生地部分はなくなっていて、右足ももの皮膚は焼けていました。黒は熱を吸収するようですが駄目です。ええ、右腕の皮膚も垂れ下がっていましたね。

腕時計なんか持つてはいません。気がついて何分かたつと、作業へ一緒に出た班長さんが捜しにきてくれた。幼い頃から知っていた縁のある方でした。三番目の兄と同級ですから九つ違い。私のことを「しーちゃん」と呼んでかわいがってください。名前は乗末正志さんです。乗末さんは、どこからか一瞬くらいの木切れを見つけてきて、「端を持ちなさい。こっちは私が持つから歩いて逃げよう」と言う。乗末さんもやけどをしていたが、ちよつと軽かった。作業に出た私が大やけどを負った。近所よしみの分、責任も強く感じられたんだと思います。

吹き飛ばされた場所から乗末さんに引つ張られるままに歩きました。鶴見橋を渡ったのか、（南側の）比治山橋を渡ったのか、はつきりとは覚えてはいません。

京橋川が見えると、やけどや怪我けがをしたたくさんの人が集まっておられた。川に飛び込んだり、次の爆撃機を避けるためか橋の欄干にぶら下がっていたりした人も見ました。体を冷やすため川に入った人たちは、だんだん亡くなられたんじゃないでしょうか。

私はひたすら早く帰りたいと思った。のろのろしていたと思いますが、休憩することもなしに歩いた。大やけどをした体で、昼間の暑いさなか、帽子もなしに歩くのは容易ではありません。軍需工場で配給を受けた、帆布で作ったような底がゴムの靴を履いて作業に出ていました。しかし、乗末さんと一緒に逃げるときには履いていなかった。吹き飛ばされたときに脱げたのでしょう。しかし探す暇はない。命が惜しくて靴下だけで逃げ、歩き続けました。

顔が腫れて、目もよく見えなくなっていました。道々で、家の下敷きになった人たちは逃げようとしても、梁はりや柱で手足が押さえられて動けない。「助けて！」

「助けて…」の声を耳にしましたが、どうしてもあげられません。自分のことで精いっぱいでした。

どこをどう歩いて逃げたのか、道筋は覚えていません。ただ、道を、まだ舗装されていない道が無我夢中で歩いた。靴もないのに地面が熱いと思わないし、傷の痛みも逃げたいばかりであまり感じませんでした。今考えれば、あそこまで歩けたのは、木切れの棒で引っ張ってくださった乗末さんのおかげです。

皮膚をぶら下げて幽霊のようにぞろぞろ歩いていたら、やがて、メガホンから声が聞こえた。「治療をしています」と叫んでいました。（爆心地から約六・二^{キロ}、安芸郡船越町Ⅱ現安芸区船越南Ⅱの）日本製鋼所の人でした。

近づく、バケツに油を入れて刷毛^{はけ}で、やけどの辺りに塗るだけの治療でした。傷を覆う包帯もガーゼもありません。それでも、ありがたかった。普段は軍需工場には入れません。工場の人たちが自発的にやってくださったんだと思います。

私も油を塗ってもらって、いったん座ったら立ち上がれなかったです。

広島市が一九七一年に発行した『広島原爆戦災誌』第三巻によると、高角砲や弾丸などを製造していた日本製鋼所広島製作所は、当日は電休日だったために従業員が多くが建物疎開作業に動員された一方、工場建物の被害は軽微だった。押し寄せる負傷者に付属病院を開放して治療活動に当たった。

工場にはひさしはずっと延びていて陰がありました。そこへ私が行ったときは、もう人がいっぱい。やけどをした人たちが体を横たえておられた。その中へちよつと自分が休める隙間を見つけて、横にならせてもらった。水は逃げる途中も飲まなかった。やけどをした人が水を飲んだら死ぬという噂うわさを聞いていましたので。乗末さんも油を塗ってもらいましたが、そこで離れ離れになりました。戦後もお

付き合いがあり、お子さんが大きくなられてもお元気でした。

横たわり目はつぶっついていても、学生さんのうわ言が聞こえてくる。「お父さん、お母ちゃん…」と言い、繰り返す声がだんだん小さくなる。死が迫っているのが分かる。私も親がいるのに、どうして来てくれないのかと正直恨みがましい気持ちにもなつて横たわつておりました。

私には日にちの記憶はありませんが、家族がいうには原爆の三日後です。

「静子、静子！」と私の名を叫ぶ声がして、父の大力万吉（一八八〇年生まれ、当時六五歳）が来てくれました。声がする方向にちよつとはい出ると、父は「あんたが静子か？」と何度も尋ねました。大やけどをして顔はカボチャのように腫れているし、自分の娘だとは信じられない様子でした。父から後に聞いた話では、比治山など負傷者が集まっている所を捜したけれど見つからない。日本製鋼所にもたくさんいるようなので立ち寄ったそうです。

それまでの間、食べる物は、むすびのようなものが配られましたが、口もやけどをしているので、いただいていません。父は私を見つけると、奥海田村の精米所からリヤカーを借りてきました。一対四角くらいの寸法でした。体が落ちないように「く」の字になっていたように思います。振動でガタガタ揺れ、泣くほど体が痛かったのをはつきりと覚えています。

私の実家はその時分、嫁いだ姉二人が呉空襲で子どもらと戻っていました。一番上の姉サダヨは二人の子とお姑さんを連れて座敷を、四番目の子を身ごもっていた次の姉ミサコは納屋の二階を子どもらと使っていました。両親は、私を休ませる場所がないのでやむを得ず、姑さんと暮らしていた中野村の借家へ運びました。母のツ子ね（一八八二年生まれ、当時六二歳）や姉たちが通って治療をしてくれました。と申しても、やけどにはジャガイモをすって塗るのがいいと聞いての治療です。お医者さんいません。一升瓶半分の食用油やガーゼを手にするのも

大変でした。

やけどに張ったジャガイモが乾燥してガーゼを取る時、私が「痛い、痛い」って泣くもんですから、父が「こんなに痛がとったら助からん」と口にしたそうです。姉たちは「生きとるのに治療はやめられない」と言って続けてくれました。後から聞いた話では、私は床に就いていた時に「海ゆかば」（信時潔作曲。大本營発表を報じるラジオ放送の冒頭に流されて国民に広く知られた歌曲）を無意識のうちで歌いもした。帰ってきて一〇日くらい後、やはり広島へ出た、私が借りていた家の隣の男性が亡くなられたことを家族は伏せていました。八月一五日の「玉音放送」を聞いたかどうか覚えていません。

何とか起き上がれるようになったのは、（九月一七日襲来の）枕崎台風の頃。大変な雨風となり、一階の畳が浮いてきて、姑さんと二人ではうように二階へ上がりました。広島から一緒に逃げた乗末さんの弟さんが向かいに住んでおられ、私

をおぶつてね、自分ちの蔵二階に泊めてくださいました。田植えと一緒にするご縁でした。私の実家も床が漬かりました。大変な台風でした（広島県沿岸部を中心に死者は二〇一二人に上った）。

秋も深まった頃、鏡の前へはつて自分の顔を見ました。顔じゅうが赤色となり、口はゆがみ、目は引きつっていた。これが私か…、あまりにも醜い姿に、あの時ひと思いに死んでいれば、なぜ死ねなかったのだろうかとまで思いました。それは泣きました。姑さんは膿うみの付いた浴衣は瀬野川で洗ってくれていましたが、「私が反対したのに広島へ行くからだ」と建物疎開作業に出たことを責められました。都会暮らしが長かったせいか、ご近所とのつながりとかを気にされない人でした。それまで音沙汰がなかった主人が私の実家を目指して帰ってきたのはその年の二月三〇日です。私には大事件でしたから日付ははっきり覚えています。知らせを聞いて、姑さんと実家へ駆け付けました。満州からエンダービーというはる

か南方の島に送られての復員でした。

大やけどの包帯をしていた私が着く前に、父も母も手を突いて、主人にこうお願いしたそうです。「娘をもらっていたが、原子爆弾で、醜い姿になりました。どうぞ、ここで別れてやってください」。しかし、主人はみんなの前で言いました。「自分が戦地で手足を失ったとしても、生きて帰って妻に面倒をみてもらう。それが心の支えだった。妻が傷ついたからといって離婚はできない」。はつきりと申しました。

話し合いがひとまず終わると、姑さんは「静子さんはここへ泊めてもらいなさい」とおっしゃいました。すると、主人は「できません。帰ってらっしゃい」と言い、一緒に戻りました。うれしかったです。おかげで主人が亡くなるまで連れ添わせてくれました（阿部三郎は一九九二年に七三歳で死去する）。

その頃には、やけどの痕にケロイドができていました。右手の指は自由に動か

することができなくなり、口の周りのケロイドでものを食べるとこぼれ落ちる。原爆の影響がどうなるかは分からない。外に出れば、「赤鬼が歩いている」と心ない人が平気で言う。うちにいても、姑さんがことあるたび実家へ帰そうとされました。主人には申し訳なく思いましたが、うつむいて人と会わないように、傷が見られないように隠れて暮らす毎日でした。



原爆で廃虚の広島デルタ中心部を南東に向かって見る。奥の京橋川の左側に架かるのが鶴見橋、その手前が阿部が建物疎開作業中に被爆した旧平塚町の一帯。

(1945 年 11 月、米戦略爆撃調査団写真班員 H. J. ピーターソン撮影、原爆資料館提供)



比治山上空から西に捉えた広島デルタの廃墟。京橋川に架かる右が鶴見橋、左が比治山橋。

(1945 年 11 月、H. J. ピーターソン撮影、原爆資料館提供)



(現在の地図の上に関連地名・名称を落とした)

地図 1 阿部静子関連広島地名略図



2

悲しみに 苦しみに



1956 年 8 月 10 日、日本被団協の結成大会の会場となった長崎国際文化会館の前で。前列左から池田精子さん、阿部、村戸由子さん。後列中央が吉川清さん、同右が川手健さん。

(吉川生美さん提供の「吉川清資料」から)

―一九四五年一二月に復員し、原爆で心身に深い傷を背負った妻を受け止めた夫、阿部三郎さんとのなれ初めを、あらためて教えてください。

阿部 こちらこそよろしくお願いします。主人の阿部三郎は山形県で大正七（一九一八）年に生まれ、大阪で大きくなりました。天王寺中（天王寺高）を出て外国語大学（当時は大阪外国語学校、現在の大阪大）へ進みましたが、卒業の前に召集となったそうです。陸軍予備士官学校で学んで、私がお見合いをした時は将校さん、中尉でした。満州（中国東北部）へ派遣されていた主人は「嫁取り」のために一時帰国して、親戚が矢野町（現在は広島市安芸区）におられたのであいさつに訪ねたんです。私の実家がある奥海田村（安芸郡海田町）砂走で先隣に住んでいた方がその話を聞きつけて、段取りをしてくださいました。昭和一八（一九四三）年の終わり頃と記憶しています。呉市にいた二番目の姉が婚礼着を快く貸してくれて、矢野町の写真館で婚礼写真を撮りました。配給のお酒で三三九度

をしたくらいでしたね。

―満年齢でいえば一六歳、既に働いておられたのですか。

阿部 その年、女学校（現在の安田女子高）を出て（広島市国泰寺町にあった）「土井田高等洋裁女学校」へ通っていました。旧姓は大力といい、兄が三人、姉四人の五女で八人きょうだいの末っ子です。四女は幼い頃に亡くなりました。

主人は、薪の荷下ろしを長兄の要^{かなめ}としている私の姿をひそかに見て気に入ったらしい。私は女学校の時分から将校さんに漠然と憧れていました。広島市内の映画館へ一緒に参りましたが、題名も劇場名も覚えていません。幼かったですよね。それ以上に、父の万吉（一八八〇年生まれ）がのぼせ上がって、よい返事をして結婚となりました。

一週間後でしたか、主人が部隊（第八師団野砲兵第八連隊第九中隊）へ戻るの

を広島駅で見送りました。厳寒の満州が暖かくなれば、お姑さん（三郎の母ナエ、一八九一年生まれ）と向こうへ渡るはずでしたが、戦争が激しくなり、諦めました。はがき（軍事郵便）でどこそこにいるということをカナ暗号で知らせてくれたらしいのですが、読み解けませんよね。満州牡丹江省（中国黒竜江省）からはるか南方のエンダービーという島へ送られたのを知ったのは、こちらへ帰ってきて。主人も原爆で私がどうなったのかは全く知りませんでした。

阿部三郎が中隊長だった『闘志とともに 第一〇二部隊第九中隊史』（一九八一年発行）によると、一九四四年一月に南方派遣の命を受け、西太平洋サイパン島を経て三月、カロリン諸島エンダービー島に上陸。米軍のサイパン占領で食糧の補給は途絶し「鼠・トカゲ等も見ないまでに食べ尽くした」。トラック島から四五年一二月二六日、米軍の戦車揚陸艦で神奈川県横須賀港へ戻った。

―被爆後の生活は、三郎さんと義母ナエさんとの三人で始まったわけですが、暮らし向きはどのようなものだったのでしょうか。

阿部 主人は将校だったので（除隊時は大尉）、公職追放（連合国軍総司令部ⅡGHQⅡが一九四六年一月政府に指令）にひっきり、私の実家、大力の親戚の材木屋さんが広島市内におったので、手伝わせてもらって何とか暮らしを立てました。お姑さんは、私を実家へ帰して慣れ親しんだ大阪へ一人息子と帰りがりました。主人は実は姑さんに小さい頃に引き取られて育ててもらったんです。恩義がありました。しかし、私を決して離縁しようとしなかった。どちらの肩も持てず苦しい立場でした。

顔や手に醜い原爆のケロイドや障害がある女房を持って一生過ごそうと思ったら、よほどの忍耐力がないと暮らせんと思います。詳しく話そうともしませんでした。主人は赤痢や栄養失調にも襲われた島で大変な目に遭っていました。私を

呼ぶ時は常に「静子さん」と、最期まで呼び捨てにしない人でした。

―ケロイドの治療は受けられたのでしょうか。

阿部 はい、妊娠をしたからです。子どものおむつなどの洗濯が大変ですからね。たらいで手洗いして絞る時代です。この右手の指が少しでも動かせるように両親が治療を受けさせてくれました。宇品町（南区）の県立病院（当時は日本医療団宇品病院）に半年間入院しました。指を前に曲げられるよう手の甲におなかの皮膚を植皮してもらって、何とか使えるようになりました。麻酔も医薬品も不自由な頃なので手術は本当に痛い。医師は元軍医さんばかりでしたが、成果が思うように上がらず打ち切りました。

ちょうど預金封鎖（政府は超インフレ阻止のため一九四六年二月、五円以上を強制的に金融機関に預け入れさせて既存の預金とともに封鎖）があったので治療

費を出してくれた父の万吉や母ツ子は大変でした。入院中、主人には黙って、出産するかどうか胸のうちを産婦人科の先生に相談したことがあります。なにせ針のむしろでしたから。主人が離婚してくれたらどんなに楽だろうか、と思っていました。

―離婚したいと夫の三郎さんに話されたことは？

阿部　ごさいません。両親は「別れてやってください」と何度もお願ひしましたけれど。そのたび、主人は「それはできません」と意思は固かった。すっかりした人でした。私もちよつと惹かれとる点もございましたから、ずるずると暮らしていたと思います。

―土足で立ち入るような質問を重ねてすみません。

阿部 この年まで生かさせてもらっているのは、私のような者を通じて原爆の恐ろしさ、惨めさ、平和の尊さを若い人たちにも知っていただくためですから。どうぞ、遠慮せずに聞いてください。

―「針のむしろ」と、そこまで追い詰められたのは何があったのですか。

阿部 姑さんは原爆に遭った者は、「うちの嫁にふさわしくない」ので帰ってもらいましょう」と言い、帰そうとされました。主人が復員しても入籍に反対されました。被爆した人は短命であるという巷ちまたのうわさもありましたから。主人の意思が固かったから一緒におれたんですけれど。入籍は長男が誕生してからでした。しかし、「この子は私が育てるから帰ってください」と私に向かって、それはもうはつきりと言われました。何回も。夫の前でも言われました。夫が「そういうことはできん」と言うので、「三郎は戦争から帰ってばかになった」「こんとになった

ものを、まだ女房に置き続ける」と大変な攻撃でした。大力の父も母も「帰ってこい。帰ったら、お前に向いた風も吹くから」と言いました。夫は私を味方してくれましたが、お姑さんとの日々は苦労続きでした。お産が近づいても、おむつの一枚も、産着も用意はしてくだされませんでした。

―夫婦だけで暮らそうとはなかったのですか。

阿部 あ頃は、子どもが親を見るのは当たり前、そんなことを考える経済的な余裕ありません。（長兄）要の友人の家を借りて住んでいた時、そこで長男を産みました。今の自衛隊海田市駐屯地（海田町）の辺りだったと思いますが、日本軍の倉庫やなんやらを進駐軍が解体した材木が残っており、通訳をしていた要が私のために入手してくれました。要は米国へ移民し、向こうで生まれた長男を実家の両親に見せるため戻ったところ（日米）開戦となり帰ることができなかった。

真珠湾攻撃をラジオで聞いて「勝ちやあせんよ、日本は」と言いよりました。米国の豊かな暮らしをね、自分が見ておりますから。

その材木で私の長男が一つになった頃、奥海田村で少し高い場所を借りて家を建てました。（一九四五年九月の枕崎台風による）水害に懲りていましたので。主人は材木屋さんで力仕事もして私どもの暮らしを支えてくれました。（一九四九年に）次男も生まれました。荷の上げ下ろしから腰を痛めて仕事ができなくなるところでしたが、（一九五二年の）講和条約発効で公職追放がなくなつて県の職員採用試験を受けることができ、幸い合格となりました。

―その頃ですよ。阿部さんが山代巴さんの求めから手記を書いて送ったのは。『原爆に生きて』（一九五三年発行）に匿名で収録された「友の手紙」と題した一節を読みます。

「近頃は毎日山へ行っております。田舎で暮らしておりますと、一年中の薪を此の寒い時に取って置くのです。山へ行くのが一番苦しい仕事です。私は右手が自由な為、木を切るのに力が入りませんのです。そして負うと血行が悪くなりますので、ケロイドの手が痛かゆくて困ります。けれども働くことがただ一つのとり柄とされている私は、がむしやらに働くのです。貴女あなたの御都合のよろしい時、場所を前もって御指定下されば、自分の時間とてあまり持てませんが、何とかして参りたいと思います。くれぐれも御自身御自愛專一の程ほど祈り申し上げます。かしこ　えり子より」

—この「えり子」というのは阿部さんではないですか。

阿部　ええ、そうです。自分の心境を誰かに聞いてほしいという気持ちがあり、

山代さんに促されて書きましたが、本が郵送で届くと風呂釜ですぐ焼きました。お姑さんに見られてはいけんと思っただけです。ですから、主人にも本を見せていません。山代さんが訪ねて来られても、私はたいがい山や畑に出ていて留守でした。姑さんが出られるので、あの方は遠慮されて来られなくなり、手紙でやりとりしたのが、あの手記です。送り主の「えり子」という名は山代さんが氣をつかって付けてくださいました。匿名ですから周りにも気づかれていません。ええ、私を書いた手記で間違いありません。この夏久しぶりに自分の手記を読み返しましたが、（収録に際して）脚色はなかったですね。

『原爆に生きて』は、作家の山代巴や、一九五二年八月一〇日に結成された「原爆被害者の会」事務局長を担った川手健ら五人が編さんした。山代の「序」によると翌日、「我々が被害者の家を直接訪問して欲しい」で集めることを相談。そ

の結果、二七編を収録する。原爆で心身をえぐられた被害者への国の援護が全くなく、社会の関心も薄かった、今は「空白の一〇年」ともいわれる時代の被爆者の赤裸々な声が刻まれる。島本正次郎や温品道義、日詰忍ら五六年結成の広島県原爆被害者団体協議会の礎をつくった人たちも手記を寄せている。

「えり子」名による阿部静子の手記後半をルビも原文のまま引く。

「その秋、風波のたえない我が家に長男が生まれた。姑は毎日枕元でいやみを並べる。不自由な体の初産故、人一倍弱って三十三日の宮参りに起きるのがやっと。長男は産れ落ちると（き）から弱く、医者ばかりにかかっておりました。姑は、

『どうせあんな親の子だから』

とか、

『同じ頃に産まれた近所の赤ちゃんは元気だ。一度だって医者へかからない』とか、私にあてつけ、家の前では近所の人々と長男の弱いことを、私にきこえ（よ）がしに話されます。

長男の弱い事は何も原爆の為でなく、私が元気な母であっても、偶然に出来た事かも知らないのに、すぐ私の被爆のことに結びつけ、角を立てて、一生の不作と嘆かれると、私は穴でも掘って入りたい気がいたします。

宮参りには里へ行くものだと言われ、三十日を待ちかねて、長男をおんぶして追われるように里方へ参りました。途中やくざ風の若者三人、私を見て、

『おい、あんな（彼女）でも子を生んだんで』

と大きな声で話し合い、からからと笑いました。其の時の私の気持ちをおさつし下さい。人通りの少ない道を選んで、人と会うことを避けて、悲しい心で歩く私は人に見られるだけでも悲しいのに、涙が出て出て泣き泣き土手を歩いたもの

です。子供に会えば、

『乞食ほいとが通る』

と言うし、私はこんな母のもとに育つ長男の将来を考え、暗い気持ちになりました。

人相が悪くなっただけで、内容までかわったわけでもないのに、外見で一切を決めてしまうなんて、なんとあさはかなことかと思うけれど、大ていの人外見を見て、二段も三段も下目に見られる。私は日に日に自分というものの自信を失い、物言わぬうつむいた人間になつてしまふのだった。

世の中も段々と平和になり、豊かになり、美しくなるのに、私は終生なおらぬ身の傷を思い、世の人々からとり残されたような寂しさで一ぱいです。子供を連れ夫婦揃って遊びにお出かけになる人々を見るにつけ、自分の身の一段とわびしく、父母と共に遊びに出る楽しさを知らない子供がいと美しい。一生日陰者的存

在に甘んじなければならぬ自分を、鏡の中でつくづく眺め、まるで悪夢でも見
てる様で、信じられない気がする事がしばしばです。でもやっぱり私は本当に不
具な体になっているのです。一生こんな悲しい心で暮らさねばなりません。それ
も年々悲しみが、こくなって来るような感じがします。

三ヶ月に一度も広島へ出るような事もないのに、勤労作業に動員されたばかり
に、そして私がいかに正直者で愛国者であった為に、こんな運命の人間となり
ました。

私は今自分の無力を嘆く。けれど、出来るだけ力になりたいと願っています。
そしてこの真実の訴えに感じられる人々に、原爆被害者の力になっていただきた
いと思います」

―そもそも山代さんは、阿部さんのことをどのように知ったのでしょうか。



1952年の「原爆被害者の会」発足で阿部も訪れるようになった「原爆一號の店」。吉川清さんが広島赤十字病院を退院した51年原爆ドームそばにバラック建ての土産物店を開き、会の事務所も置いた。（吉川生美さん提供の「吉川清資料」から）

阿部 きっかわ 吉川さんのおうちで会っ

たと記憶しています。山代さんも来られていて「手記を書いてください」と集まっていた皆さんに言われたんです。私は書けませんと何度も断わったんですが、やはり誰かに聞いてほしいという気持ちがありました。

—「原爆被害者の会」を呼びかけて幹事を務めた吉川清さんですね。そういうば、吉川

さんの著書『「原爆一号」といわれて』（一九八一年発行）には、阿部さんとは「一九五二年から親類づきあいをしていた」とあります。どのような出会いだったのでしょうか。

阿部 日にちは覚えていませんが、その頃の夏だと思います。私の母と長男との三人で広島市内へ出かけ、打ち上げ花火を相生橋からだったと思いますが、ここから見ました（一九五二年八月九、一〇の両日、「ひろしま川祭り」が原爆ドームそばを流れる元安川の河岸で開かれた）。帰り道、ドームそばにあった土産物店（看板は「原爆一号の店」）に、「原爆被害者の方は声をかけてください」と書いてある案内を見て入り、吉川さんや（妻の）生美さんと初めてお会いしました。吉川さんが「原爆一号」と呼ばれていることや、活動も存じませんでした。話してみると、異常な親しみが私に起きました。

米国の代表的な写真誌『ライフ』が一九四七年九月一日号で「平和都市」広島特集を組み、広島赤十字病院に入院していた吉川清が上半身裸となったケロイドの姿を一瞥丸ごと当てて掲載。その扱いや反響から「原爆一号」の呼称が国内の新聞・ラジオを通じて広がった。吉川は一九八六年に七四歳で死去。

阿部 吉川さんとの出会いからお店（兼自宅）を訪ねては、原爆に苦しむ人たちと話し合うようになったんです。気持ちのやり場がなく、あそこへ行けば、いろんな仲間が集まっておられて心が和むんですよ。背中にやけどをしたご婦人は銭湯で他のお客さんに気持ち悪がられ、番台の人から来ないように言われた。そういう婦人が見えると、吉川さんはバラックに付けていた、お風呂を沸かしてね。優しくなさっていました。

私が家にいなきやあ、姑さんはうれしい。子どもが幼かったので必ず一人は連

れて、下の子の時はおんぶもして訪ねました。少しずつ心の傷が癒えるんです。夜遅くなつて山陽本線の終電が出てしまつて呉線の終電に乗り、海田市の駅から歩いて帰ったこともあります。会合（「原爆被害者の会」や一九五五年にできた「八・六友の会」に参加すると、私は自覚していませんでしたが、少し元気になつて帰っていたんです。今思うと私の胸もね、さっぱりしておりました。姑さんは黙認していたのだと思います。吉川さん夫妻はお子さんがいないので私の三人の子どもをかわいがつてくださるから、主人も親しくなりました。次男が（一九七六年に）結婚する時にはご夫妻が仲人をしてくださいました。

GHQの占領統治が明けた一九五二年は、「原爆被害の初公開」とうたった写真雑誌『アサヒグラフ』八月六日号が計七〇万部を売り上げ、新藤兼人監督が広島で初めてロケをした『原爆の子』が公開されるなど原爆への関心が広がる。



1955 年 8 月 6 日、平和記念公園に完成した広島市公会堂で開かれた第 1 回原水爆禁止世界大会に長女（手前）を抱いて参加した阿部と、河本時恵さん（前列左）。

（『原水爆禁止運動資料集』第2巻）

吉川らによる「原爆被害者の会」は、広島市民病院での無料診断の実施などを求め、原爆の禁止に向けて「被害者の団結と組織的な平和運動」を唱えた（『原爆に生きて』収録の川手健「半年の足跡」）。阿部は匿名手記で「私の村の負傷者に四（一）五名お話して、被害者の会への入会を勧めております」と書いていた。

―「原爆被害者の会」の集まりに参加し入会も促すとなると、近隣の人たちから例えば「アカ」とみられるような恐れを抱かれたり、夫の三郎さんから何か言われたりすることはなかったのでしょうか。

阿部 小さな運動でしたから、あの頃の前爆の運動は。私はうつむいて傷が見えないように暮らしておりました。人さまに目立つようなことはなかった。仲間たちによつて自分が慰められ、元氣をもらう。そういう会でした。私が明るく元氣になることを主人も喜びました。行くなと言ったことはありません。

―同世代でみても、女性が外で活動することが珍しかった頃に、お姑さんとも一緒に暮らしておられた市井の主婦が、なぜ被爆者の集まりに参加するようになり、一九五六年三月に上京して初の「国会請願」までに至ったのでしょうか。

阿部 私の心がたまらなかったわけです。慰めてほしいのに、生傷に塩をつける



1956 年広島からの原爆被害者国会請願メンバー。日本被団協初代事務局長となる、藤居平一さん（中央）を囲むように、前列左から 3 人目が広島県被団協理事となる島本正次郎さん、右へ阿部の次男、阿部。後列左端に「原爆の子の像」（1958 年除幕）の建設を呼びかけた河本一郎さんも写る。

ように知らない人からもしじめられるんですよ。「赤鬼が歩いとる」と。それがたまらん。私も爆発というか、そういうチャンスがあるなら行かしていただこう、勇気を持って行きたいと思いました。近くに住んでおられた桧垣先生が熱心に何回も私の家に来られて、（初の「国会請願」へ）「一緒に行ってください」と頼まれました。それを姑のナエさんも聞かれて、「桧垣先生が言われるんだ

から、行かしてもらいなさいよ」とだんだんになったという感じです。仕方がなかったのだと思います。夫は意思が固いし、私はしぶといし。吉川さんや桧垣先生、お付き合いをする方々から元気をいただいて帰るのが効いたんでしょう。

桧垣益人は一九四五年八月六日、広島県海田地方事務所に出勤途上の広島駅地下道で被爆した。自宅は当時、大手町（中区）にあり妻や五女は死去。五六年七月に結成した安芸郡原爆被害者団体連合会や、海田町原爆被害者会の会長を務めるなど広島県原爆被害者団体協議会の組織化に尽力し、同事務局長を六一年から二三年間にわたって担った。九〇年に九四歳で死去。

―「国会請願」で上京する前日、原爆被害者広島県大会が一九五六年三月一八日、約三〇〇人が参加して千田小学校講堂（中区）で開かれました。「原・水爆実験

より原爆症の治療法を確立することが第一だ」との宣言をして、請願への代表団を激励したとあります（中国新聞一九五六年三月一九日付）。

阿部 大会には誘われて参加しましたが、私はあいさつとかはしていません。「国会請願」に加わったのは桧垣先生が家に何回も来られて姑さんを説得されたからです。ただ、子ども三人（一九五四年に長女が誕生）の面倒は見切れんと言われているので、次男（当時六つ）を連れていくことにしました。嫁に行くとき持つてきた着物を出して着て、急行「安芸」に乗り東京へ向かったわけです（広島駅を一九日午後二時半に出発し、東京駅へは二〇日午前九時五分に着いた）。

米軍の水爆実験により中部太平洋でマグロ漁船第五福竜丸の乗組員二三人が「死の灰」を浴びた一九五四年の「ビキニ被災」を機に五五年八月六日、初の原水爆禁止世界大会が広島市で開かれ、翌九月には原水爆禁止日本協議会が発足し

ていた。

一九五六年三月二〇日の原爆被害者らによる初の「国会請願」は日本原水協が呼びかけた。『原水爆禁止ニュース』第六号（五六年四月一日発行）によると、広島・長崎の「原爆被災者請願団」は四一人（うち女性一七人）。青森、長野などの代表約一〇人と手分けして衆参両院議長に面会し、「太平洋の水爆実験禁止」「原爆被災者の治療費国庫負担」などを訴える。

―東京駅に着いた記録映像や写真を見るとカメラは、「原爆被害者」のたすきをかけて、ケロイドが目立つ人たち、わけても若い女性を捉えています。阿部さんは当時二九歳です。

阿部 広島からの代表で行くからには、写真を撮られるのもやむを得ないと思っていましたけれど、いい気はしませんでした。顔のやけどの痕が真っ赤でしたか

らね。我慢したのでしょう。しょうがないですね。今でもライトを当てられると、顔のデコボコが一層目立つ。新聞・テレビに載ったものを見たら、さめざめと泣くみたいな気持ちになります。しかし、原爆の傷を受けた証人として一生生きていかなければならないという勇気も生まれてきたのでした。苦しさ、悲しさの中からであり、皆さんと行動する中で生まれたんだろうなと思います。

―翌二一日には二〇人で首相の鳩山一郎邸（東京都文京区音羽）に薫夫人を訪ねた様子が記事になっています。見出しは「鳩山夫人に涙の訴え 原爆被害者婦人代表ら」、本文は阿部さんが代表して願いを述べたとあります（中国新聞一九五六年三月二二日付）。

阿部 鳩山夫人には「主人に皆さんのことはお伝えします」と言っていたきました。この記事には「一粒種の手を引いて」とありますが、連れて行ったのは次

男です。薫さんは優しく、次男がカステラをよばれた写真があります。

鳩山邸へ行く前には、池田勇人さん（竹原市出身、当時は元大蔵大臣。六〇―六四年首相）を自宅に訪ねたんです（自宅は新宿区信濃町にあった）。池田さんは、私たちの苦しい生活心情を聞いて涙ぐまれた。最後に「日本はアメリカに弱いからねえ」とつぶやくように言われま



1956年3月21日、鳩山一郎首相の私邸を訪れて薫夫人（手前左端）に広島からの女性陣を代表してあいさつする阿部（右から3人目）。次男を連れて上京した。右隣は村戸由子さん。

した。アメリカには強いことが言えないから、われわれが一〇年も辛酸をなめたのではと思いました。被爆者は体は弱いし、風邪はひきやすいし、差別に遭い、恥ずかしいし、家庭もゴタゴタする。本当につらい時代でした。池田さんの言葉を聞いて、情けなさ、運動の前途の多難さも胸いっぱい感じました。

—今も記憶するのは、立ち上がったけれど…の気持ちの方が強かったということでしょうか。

阿部 放っておかれて、たまったもんじゃない、と思いました。国会請願へ行っても、いいお返事はなかったし、心を感じたことを帰りの列車（請願・訪問を終えた足で東京駅を午後九時三〇分出発）の中で書いたのが、あの歌、「悲しみに苦しみに」です。

悲しみに苦しみに

笑いを遠く忘れた

被災者の上に

午前十時の陽射しのような

暖かい手を

生きていてよかったと

思いつづけられるように

詩の心得は女学校の時分からありません。急にふと浮かんできます。私の心の叫びをノートの切れ端に書いて、向かい合わせの席に座っておられた藤居先生に「今こういう心境なんです」と一番に見ていただきました。先生は広島へ戻ると、新聞社の方々に話のタネにしてくださいました。曲も付けられて広がっていき

ました。「国会請願」に参加して初めて藤居先生を間近に拝見し、あの歌をお見せしたのがきつかけとなり、私をかわいがってください、子どもの成長にも心を寄せてくださいました。次男は先生と同じ早稲田大へ進みました。同窓会の記念大会に先生が広島の「稲門会」代表として行かれる際には、社会人となっていた次男を誘っていただきました。

原爆で父や妹を失った藤居平一は、家業の銘木店を営み、広島市民生委員の活動から原爆被害者の窮状を受け止めて「まどうてくれ」と被爆者への国家補償をいち早く唱えた。「国会請願」に続く一九五六年五月二七日、広島県被団協を設立して代表委員に就く。八月一〇日、日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）の結成で初代事務局長も担い、代表委員の一人となった森滝市郎（当時、広島大教授）とともに被爆者運動の礎をつくり率いる。九六年に八〇歳で死去。



1956年5月27日、広島県被団協の結成総会が広島市基町のYMCA講堂で開かれた。立ってあいさつしているのが代表委員に就く藤居平一さん。
(中国新聞撮影・提供)

―初の「国会請願」から約二カ月後の広島県被団協結成に続いて、七月一八日に安芸郡原爆被害者団体連合会、同二四日に海田町原爆被害者会が発足しています。記録に当たると郡全体の会員は四六〇〇人を超え、海田町は二三四人、いずれも桧垣さんが会長を務めています。

阿部 池田（勇人）さんは「今度は組織をつくって来なさい」とも言われました。それで、桧垣先生と夜な

夜な集落を回って名簿をつくり、会をつくるお手伝いをしました。桧垣先生は奥さまや五番目の小さい娘さんが家の下敷きになって焼け死んだんです。その悲しみ、原爆に対する怒りを体全体に持っておられ、火の玉のようになって行動されました。大きい娘さんの縁談で、あの頃はよくあった間い聞きに役場の人間が「桧垣はアカだ」と言いふらしている話も耳にしました。レッテルを貼られ、差別される中で被爆者のお世話をされました。東京へ何度も出向かれ、政府や国会への陳情は何百回にもなりました（県被団協事務局長を退いた一九八四年までに上京は延べ四八九日に上った）。大変に骨を折られた。苦勞をなさったと思います。

被爆者のよりどころができたのは、本当にうれしかったですね。それまでは外で擦れ違っただけの見知らぬ人に「赤鬼」とからかわれたり、家庭でも姑さんに離婚を迫られたりして、悲しみに遭っておりましたから。原水禁世界大会に集まった人たちの言葉、まなこがとても優しく、私は元気をいただきました。差別を

なくす人間としてお付き合いをもらいました。

―県被団協の結成から一九五六年八月七日には、「広島県原爆被害者大会」が平和記念公園に前年でできた市公会堂で約五〇〇人が参加して開かれます。阿部さんは「国会請願団」を代表して、①治療費の全額国庫負担②国による健康管理の実施③被害者の実態調査・研究・治療機関の設置④原爆犠牲者への弔慰金、傷害年金制度の制定を提案しています（『広島大会議事録』Ⅱ一九九五年発行の『原爆禁止運動資料集』第三巻収録）

阿部 記憶はおぼろげですね。人前に出るようなことはなく、うつむいて暮らしておりましたから、やれと言ってくださる方がおられたのでしょうか。これを見ると確かに私が提案内容を読んでいますね。自分の思い、叫びだったのは間違いありません。

「これらの要求を実現することは、そう簡単にゆきません。一被害者として、私は同じ病で苦しんでいる人々とともに、斗たたかってゆきたいと思います。一瞬、五千度という熱にさらされ、幾多の苦しい体験をして、今日まで生きてきた私たちは、この命を一日でも長く、生きながらえたい気持ちで一ぱいです。皆さん、私たち生き残ったものが、強く生きぬくために、お互いに、助け合い、手を握ってやりましょう」

―大会では最後に参加者全員が「悲しみに苦しみに」と「原爆を許すまじ」（一九五四年発表）を斉唱しています。

阿部 あの後、日本被団協の結成大会が開かれる長崎へ向かう汽車の中で、曲を付けてくれた村中（好穂）さんが、広島からの参加者に合唱指導をしてくださいました。村中さんは広島合唱団を指導していた方です。会場へ行くと、壇上のテ

ーブル前に私の「悲しみに苦しみに」の歌詞を書いた大きな紙が張っており、紹介されてあいさつをしたように思います。

日本被団協は、第二回原水禁世界大会二日目の一九五六年八月一日、同じ会場の長崎国際文化会館に約八〇〇人が参集して結成し、こう宣言した。

「かくて私たちは自らを救うとともに、私たちの体験をとおして人類の危機を救おうという決意を誓い合ったのであります。私たちは今日ここに声を合わせて高らかに全世界に訴えます。人類は私たちの犠牲と苦難をまたたび繰り返してはなりません」「私たちの受難と復活が新しい原子力時代に人類の生命と幸福を守るとりでとして役立ちますならば、私たちは心から『生きていてよかった』とよろこぶことができるでしょう」

海田町原爆被害者会の『被爆三十年の歩み』（一九七五年発行）によると、会は

桧垣や阿部、東海田町（海田町）婦人会長の三人を派遣した。

―会場の長崎国際文化会館（一九九六年に現在の長崎原爆資料館に建て替え）前で、広島から初の「原爆被害者国会請願」を共にした池田精子さん（後に広島県被団協副理事長）や村戸由子さん（一九五八年に日本原水協の派遣で欧州を回って原水爆禁止を訴える）、吉川さんらとの写真や、「悲しみに苦しみに」の歌詞が張られた会場で阿部さんを撮った貴重な写真が残っています。

阿部 長崎であいさつをしている、この写真は、首を曲げて下を向いています。書いてきた文書を読んでいるんでしょうね。「みんな、被爆者は団結して、平和を求めましょう」とかいような話をしたような気がします。歌を作ったから壇上に立たせてもらったんですけれど。参加者の皆さんとともに歌ったことはよく覚えております。私ですか？歌うのは好きですが、その他大勢のアワワ、うまくは

ありません（「原爆被害者援護法」を討議した原水禁世界大会・第四分科会の最後に参加者全員で合唱し、日本被団協の結成大会は同じ会場で午後七時から開催された）。

—さらにこの年の一九五六年一一月には、県被団協や広島合唱団の共催による「広



1956年8月10日、日本被団協の結成大会は長崎国際文化会館で開かれた。自作の「悲しみに苦しみに」の詩が張られた壇上であいさつする阿部。

島のうたごえ」大会が基町（中区）にあった児童文化会館で開かれ、「悲しみに
苦しみに」がやはり披露されています。

阿部 名もない、しかも虐げられ、我慢して暮らしていた私なんかのつぶやきみたいな歌が広まり、本当にうれしかったです。三番目の兄良三が勤めていたキンビール（安芸郡府中町の広島工場）でも歌声大会があつて、「悲しみに苦しみに」が歌われたそうです。兄が合唱のリーダーに「作詞したのは私の妹です」と言ったら「本当か、腹違いじゃないのか」と冗談を飛ばされたそうです。母に誇らしげに報告しました。主人は、私が被爆者の活動に参加して元氣をもらって帰るのを喜んでくれました。県庁でお世話になっていましたが（一九五五年に県職員）、原水禁世界大会へも快く送り出してくれましたよ。

長崎で私の「悲しみに苦しみに」を知った酒井（忠好）さんは、わざわざ海田町砂走の私の家を捜して訪ねて来られました。お父さんが艦砲射撃に遭い亡くな

っておられた遺児でした。戦争で不幸になった人たちに思いをかけられ、私にも優しくしてくださいました。岐阜県の羽島市長になられ（一九八〇年から二期）、証言に呼んでいただきました。秘書だった方とは今もお付き合いがあります。私の誕生日には必ずカードを送ってください、この前も、私が今いるこの「八景園」（南区の老人ホーム）にご夫婦で来られました。ありがたいですね。

「原子爆弾の被害者が今なお置かれている健康上の特別の状態にかんがみ、国が被爆者に対し健康診断及び医療を行う」。社会の片隅に迫いやられていた被爆者自らが声を上げて団結し、地元自治体や医師、選出の国会議員も動いた。一九五七年四月一日、原爆医療法は施行される。しかし、原案にあった医療手当の支給が削られるなど心身ばかりか生活基盤も根底から破壊された被爆者の救済には程遠かった。日本被団協は国家補償に基づく被爆者援護法の実現を求めていく。

安芸郡海田町に住む阿部静子は一九六〇年九月二八日、被爆者健康手帳を広島県から交付された。

―被爆者救済と原水爆禁止は、被爆者運動の柱でした。英国による南太平洋クリスマス島での水爆実験の中止を求めて一九五七年三月二五日、吉川清さんや「八・六友の会」でも一緒だった河本一郎さん（六〇年には原爆ドームの保存を呼びかける）ら四人が初めて、原爆慰霊碑の前で抗議の座り込みをしています。一九七三年からは核実験の実施が報道された翌日には座り込む、今も続く被爆地広島からの連続抗議活動に参加されたことは。

阿部 誘われて一回か二回あります。いったったか詳しい年は覚えておりません。抗議文をどなたかに渡されて読みましたが、私は進んでそういうことができず、情熱がまだまだ足りないなあと感じたことを覚えとります。森滝（市郎）先生が

こう話されたのを何度も聞きました。「小さな女の子が『座っとなつちや止められはすまいでえ』と目の前でつぶやいたのが私の胸に突き刺さった」と言われました（女兒の問いかけから、森滝は「自分のためではないもののために座っている」のであり、座り込みを通じて「精神的原子の連鎖反応が物質的原子の連鎖反応にかたねばならぬ」と思ったというⅡ一九八四年発行『座り込み10年―ヒロシマの記録』収録の『座り込み10年』の『前史』と理念」）。

私も何か行動を起こさなければ、事は運ばないと心ではいつも思っておりまして。海田の田舎において活動すると、役場で陰口をたたかれ、そういうことにも反発を感じておりました（海田町原爆被害者会の幹事を一九五九年から務めていた）。

森滝市郎は広島高等師範学校教授だった一九四五年八月六日、江波町（中区）

の三菱重工業広島造船所の動員学徒教官室で被爆し右目を失明する。原爆孤児を支援する「精神養子運動」や「平和と学問を守る大学人会」を展開し、五五年発足の日本原水協、五六年結成の日本被団協の代表委員に就任。原水禁運動の分裂後も被爆者運動を率いて、「人類は生きねばならぬ」「核と人類は共存できない」と核の絶対否定を国内外で訴え続けた。九四年に九二歳で死去。

―一九九六年に亡くなった藤居平一さんの追悼集『人間銘木』（一九九七年発行）へは、阿部さんは追悼文「火の玉の救世主」を寄せられています。

「被爆後十年間、日本政府は何の手も伸べてはくださらず、そこに居るかとも言ってもくださいませんでした／世の中には神も仏も無いものかと悲痛な思いで暮らしておりました。そんな時、捨て身の救世主として、藤居先生は立ち上がってくださったのです／暗い私共の心に灯を点してくださいました」

先人たちの多くが亡くなり、被爆者運動の始まりからを知る数少ない一人となりました。あらためて今、どんなことを思われますか。

阿部 出会いを得た人々、亡くなられたあの方たちの熱い心、行動を知っておりますから、私なりに何とか運動をしようと生意気なことを考えて証言活動に取り組み、生きてまいりました。自分の力不足を何回も体験しました。けれど、それに負けずに続けてきたと思っています。石を投げなければ波も立ちません。今もそういう気持ちはありますが、体が思うように動きません。この世で「最後の証言」だと思つて、皆さんのお尋ねにしっかりこたえようと思つております。

3

冷戦下の 世界平和巡礼



1964年4月16日、広島駅を出発する世界平和巡礼団のメンバー。横断幕の前列右から3人目が阿部、左端に団長の松本卓夫さん、その後ろにバーバラ・レイノルズさんが写る。

(中国新聞撮影・提供)

阿部静子は安芸郡海田町で実家の田畑を耕し、二男一女の子育てと忙しい日々が続いていた。そこへ思いもしなかった要請が舞い込む。三七歳だった。

―海田町が町制六〇年となった二〇一六年、「農耕牛を使う阿部さん」という写真が中国新聞に掲載されています（九月三〇日付「かいた今昔」第七回、写真提供は海田郷土文化研究会）。初の東京オリンピックが開かれる「一九六四年撮影」とあり、記事では「このころ、海田町内で牛を使う農家の女性は2人いて、そのうちの1人が私でした」とコメントしています。

阿部 米とイチゴの二毛作をしていた頃です。田んぼは、もともとは実家の父がやっていました（大力万吉は一九五八年に七八歳で死去）。父は、末の娘が原爆でこういう体になって嘆いて、嘆いて、最期まで気にしていました。私も親不幸な娘じゃなあと思うて、いつもすまんなあと思うて暮らしていたもんですから、父

が足を悪くして牛使いがちよつと無理になった頃から、罪滅ぼしという
とんですが、傷が残るこの手足で
するようになりました。百姓仕事は
私にはまっていたように思います。

―実家の田は、どれくらいの広さだ
ったのでしょうか。

阿部 一町歩（約一畝）くらいでし
ょうか。今なら耕運機でバタバタと
耕しますが、牛を使ってコトリコト
リと時間をかけて耕しておりました。



1964年春、安芸郡海田町砂走の実家の田を牛で耕す阿部。
夫の三郎が撮影。

田は生き物ですからね。主人は県庁の土木部門に勤め、音戸大橋の用地買収などで忙しくしていました。でも日曜の朝晩には、牛小屋のフン掃除を頼まずともやってくれました。大力の母のことも何かと心配してくれてね。母が亡くなった時（ツ子は一九八一年に九八歳で死去）、姉たちは「静子が家のために一番力になったんだから」と言ってくれて相続しました。

—写真が撮られた一九六四年に、冷戦下の米国からフランス、東西ドイツ、旧ソ連などの八カ国を回る「広島・長崎世界平和巡礼団」に参加します。どのような経緯でメンバー募集に手を挙げられたのでしょうか。

阿部 私の「悲しみに苦しみに」の詩を、広島ペンクラブの会長だった田辺耕一郎さんが高く評価してくれました。その田辺さんから「こういう機会があるんだ。阿部さんぜひぜひ参加してください」と言われました。私が田んぼで耕作をやっ

ていたのは、傷がひどいし、人前に出る必要もなかったこともあります。目立たんように暮らしていました。しかし、田辺先生が何度も勧めてくださいますから、それじゃあと手を挙げてみたら意外にも採用になつて。それでもまだ悩んでおりましたけれど、主人が「せっかくだから行かせてもらいなさい」と背中を押してくれたんです。

―田辺さんとの付き合いは長かったのですか。

阿部 あの先生はフランスでしたか、被爆者を励ましてくださる基金を受け取つて宇品町（南区）で「憩いの家」をやっておられました。時々招いて、奥さまの手料理で押ししやら、故郷の雑煮やらを振る舞ってくださいました。

「広島憩いの家」は、フランス在住の米国人作家アイラ・モリスとスウェーデ

ン人作家エディタ・モリスが呼びかけて一九五七年、広島市内の病院へ通う被爆者の宿泊施設（木造2階）として開所。田辺耕一郎は五〇年に日本ペンクラブ（会長・川端康成）の広島訪問を働きかけ、国際ペンクラブ理事のモリス夫妻の支援へつながった。施設は、田辺が九一年に八七歳で死去した翌年に閉鎖。

―派遣メンバーに選ばれたのは、誰から聞かれたのですか。

阿部 電報が家に届きました（昭和三九年一月一六日発信の「スナバシリ（海田町砂走） アベシズコ」宛て電報は、「サンカパス 一八ヒ（日）（午後）一ジ イシカイカンエコラレタシ レイノルス」）

―バーバラ・レイノルズさんとも知り合いだったのでしょうか。

阿部 新聞でお名前や活動は知っていましたが、お会いしたことはそれまであり

ません。電報を受け取り（下中町、現在の中区中町にあった市医師会館へ）行ったのはいいけれど、大学の先生やお医者さんと偉い人ばかり。これは大変だなあと思いました。しかも、女学校時代に英語は「敵国語」だったので全く駄目、パスポートを手にしても自分の名前をローマ字で書くのにも苦心しました。本当に行くとなると、三人の子を置いて行くわけですよ（当時、長男は高校生、次男は中学生、長女は小学生）。姑さんは、私がいないと喜ぶ人でしたから長旅もいかなと思って。主人は、原爆の傷がある女房が世界を巡ることを喜び、口にはしませんでしたが誇りに思ってくれたと思います。

「世界平和巡礼」を提唱したバーバラ・レイノルズは、原爆傷害調査委員会（ABCC）へ夫が赴任した一九五一年から広島で暮らす。「被爆者は世界の平和への動きを促進させる力がある」と六二年は自身を含めて三人、六四年は長崎からも

募り、私財を投じて巡礼を実現。六五年には外科医原田東岷らとワールド・フレンドシップ・センター（WFC）を南観音町に創設する（現在は中区舟入中町）。クエーカー教徒であり、「私も被爆者」を口癖とした。九〇年に七四歳で死去。

―日本人の海外渡航が自由化となったのがやはり一九六四年です。「広島・長崎世界平和巡礼実行委員会」（名誉委員長・浜井信三広島市長、委員長・原田東岷市医師会長）は国内や訪問先での募金から旅費に充てる計画でしたが、身の回りのお金はどう工面されたのでしょうか。一^{ドル}は三六〇円でした。

阿部 近所やいろんな方が私を励ますためにお餞別をくださいました。先ほどの私が農耕牛を使う写真も、向こうで会うことになっていた4Hクラブ（農業青年クラブ）の方たちに見ていただくために主人が撮ってくれたんです。ハワイには大力の親戚、カリフォルニアには兄がいましたから。女性は「日本着を用意する

ように」と言われたので一重の着物をあつらえました。主人は私用のカメラも買ってきて、初めてカメラを手にして撮影の特訓を出発前に受けました。

―平和巡礼団は四月一六日、静岡英和女学院院长の松本卓夫さんを団長に四〇人が広島駅午後三時二〇分発の上り急行「安芸」で出発した、と当時の新聞記事にあります。メンバーでお知り合いはいましたか。

阿部 河本時恵さんくらいです。吉川（清）さんのお店で知り合い、「八・六友の会」でもご一緒させてもらいました（一九五五年の第一回原水禁世大会に長女を抱いて参加し、会の旗を河本と手にする写真が『原水爆禁止運動資料集』第二巻に収録。⁵¹ 参照）。団長の松本先生（広島女学院院长の時に被爆し、妻は死去）、芝間タヅさん（稻荷町で被爆。戦前に留学経験があり、市内で英語教室を運営）、副島まちさん（南千田町Ⅱ中区南千田西町Ⅱの自宅で被爆した一三日後に自らが

へその緒を切って四男を出産。兵庫県原爆被害者の会を結成した一九五六年に『あの日から今なお』を著す）も存じあげていませんでした。

阿部が保存する「平和巡礼団員名簿」には二五人の名前が記載される。「農業阿部静子」や広島原爆病院医師、物理学者、宗教家、労組書記長、評論家（織井青吾、名簿では本名の浜井隆治）ら多士済々の顔ぶれ。別の手書き名簿には同行通訳は「ICU（国際基督教大）学生九名」とある。団員となった中国新聞社社会部次長・満井晟による同行記「世界の中のヒロシマ」（一九六六年発行『炎の日から20年』収録）によると、被爆者は長崎を含めて二六人がいたという。

―米国へ向かうに当たって、どんなことを思われたのでしょうか。

阿部 私 は原爆の「生き証人」として、偉い皆さんが車のボディーならそれを支

えるピンになろうと思いました。「目立ったことはしなくても任務だけはしっかりと果たすんだ」と主人にも言われました。特別な使命を持って行くのだから、ちょっと責任感もあって「旅日記」をつけました。旅の間に主人とやりとりした手紙も残っています。亡き主人（阿部三郎は一九九二年に七三歳で死去）の書斎本箱にあったそうです。孫を私らの家に住まわせるので片付けをしたら出てきて、次男がこの前、ここ（阿部が暮らす南区の老人ホーム「八景園」）に持ってきてくれました。残っているのに私もびっくりしました。

—今まで折に触れて手に取ったり、読み返したりはしなかったのですか。

阿部 一切ございません。この私の「旅日記」が貴重かどうかは分かりませんが、どうぞお読みください。

「昭和39—4—16日 木 晴 今日はいよいよ出発である／ご近所の方々も

皆家族を失い、自ら傷つき、後障害に苦しむ方々である。私の出発を心から喜び力づけてくださった／此の御支援にこたえる意味でも私の全力をつくし、世界の人々に原爆のおそろしさを語り、空しく^{むな}苦しみ亡くなった人達の平和への願いを代弁する決意である」

―平和巡礼団は、神奈川・箱根で合宿して駐日大使館員や専門家から訪問先の事情を聞き、四月二一日に羽田空港を飛び立ちハワイ・ホノルルへ向かいます。最初の訪問地で真っ先に浮かぶ記憶、思い出は何でしょうか。

阿部 日本から移民された方々が明治・大正の心というか、お寺をとっても大切にされている姿です。その頃、私どもはだいぶ信仰心が薄れていましたから。オアフ島から向かったハワイ島で私は通訳の方とお寺にも泊めていただきました。それと、主人が現地の新聞へ私が全く知らないうちに投稿していて、「大力の娘さん

が来るそうな」と親戚や海田ゆかりの人が大勢来てくださったことです。

「ハワイ・タイムス」へ阿部三郎が送った手紙は一九六四年四月一八日付に掲載された。「日布時事」を一九四二年に改題した同紙は八五年に廃刊。

「妻が原爆の被害者としてこの世界平和親善使節団の一員に加わるにあたって、私の最も懸念していますことは、米国人、特に在留邦人の多くの方々に心から歓迎し、その労をねぎらっていただけるものと確信していますが、一部の人達には原爆被害者がみにくい傷跡を見世物として白人のあわれみをこいに來たのではないかと誤解される点でございます／広島の被爆者の願いを、一人でも多くの国々の方々に知っていただくためです／渡米以來のご苦闘によってアメリカ、殊に^{こと}ハワイの中核をなす基盤を築かれた皆様／妻の気持ちは純粹です。この傷ついた心

と身体を捧^{たて}げて一農家の主婦として、牛耕も畑作も誰にも負けずに立派にやり遂げて来たのです。私達のような被爆家庭があることを知っていただき、明日へのよりよい世界の平和に、共に進む勇氣をお互いに持つていただく為にも、妻は皆様に何ものかを訴えることと思います」

―いわゆる「亭主関白」が当たり前だったのに、三郎さんの妻への気遣い、愛情の深さはすごいですね。

阿部 ありがたいです。自分も戦った米国へ女房が被爆者として行くのだから批判されるのではと心配したんだと思います。近づく三三回忌の法要は盛大にしようと思います。

―先ほど「私は生き証人」と言われましたが、米国の人々に何を一番に伝えよう

と思われたのでしょうか。

阿部 原爆で人が大変な被害を受けた、被害者が今もいるんだということを米国の人たちに知っていただきたい、その一念でした。ご存知ないんですよ、原爆の被害について、原爆被害者の多さを米国は。原爆を投下したけれど「被害は軽微であった」などと国民に世界に対しても報告したそうで、何が軽微なもんかと反発もしておりました。原爆によって、私の体はこうなったことを聞いていただきたいな、と思いました。

―被爆から一九九年、原爆を落とした米国を恨む気持ちは薄れていたり、消えていたりしたのでしょうか。

阿部 なかったというと、うそになります。被爆してからの日々は、もがいて、もがいて暮らしておりましたからね。いろいろと恨んだり、死にたいと思ったり、

嘆いたり、鏡を見ては諦めたりしておりました。この顔を抱えて子どもたちの参観日へ行くんですよ。孫はかわいい姑さんが「行ってやんなさい」と言われるから、行かしてもらいんですが、美しいお母さんたちの間に交じって参観すると、子どもが肩身の狭い思いをするのではないかいつも思っていました。自分の不運を嘆きました。原爆さえなければ、それもこれも戦争をしたからなんだ、戦争や原爆はなくさなければ、と思うようになりました。その頃には日本軍が中国でしたことも知っておりまして。憎むべきは戦争だと思えます。

平和巡礼団は四月二三日ロサンゼルスへ降り立ち、米国本土を西海岸から回っていく。阿部が大学ノートに横書きしていた「旅日記」を繰る。

「4・23 16階のルームに泊まって洋風バスを初めて使った。何もおそれるこ

とはないではないかと思った／至るところに大鏡があり、自分の姿がよくうつった。つくづく米国ロスアンジェルスまで来る姿ではない。しかし来ているのだ。

夜2時に休む」

「4・26 午前10時、(ロサンゼルス北東の)パサディナ仏教会で／3人でスピーチをする。日系の老人や子供が本堂へ一ぱい参っておられた／(安芸郡畑賀村出身の一世女性に)砂走の大力だと云ったら／おぼえて下さっていた。5^{ドル}お小遣いを下さる。日本料理屋で冷ヤツコと赤だしとおすしをごち走になる」

「4・27 クエーカー教徒の子供ばかり集まる小学校6年から8年までにお話した。皆熱心に聞いていた。人種はいろいろで黒人もいた。大切な勉強時間をさいて私共の話を聞いて下さるのに感激した。兎^とに角愛情深い国民である」

「4・28 サンフランシスコ行の飛行機に乗る。そして此の日記を書いている／空港につくと一番先に農武^{のぶいち}一兄が立っていてくれた。九人出迎えていてくれた。

特に心配していた兄の歓迎に心から泣いた」

―団はロサンゼルスから「北、中、南」の三コースに分かれます。南部へ向かう前に、阿部さんは松本団長や満井記者、通訳の女子学生、ICU生だったバラさんの息子とカリフォルニア州都サクラメントを三〇日に訪ねています。

兄の大力農武一さん（一九〇三年生まれ）は向こうにお住まいだったのですか。

阿部 農武一は、私の父万吉の弟で米国へ渡った房吉の長男でしたが、万吉の次男として育ちました。父も若い頃は米国に少しおりました。房吉さんは「貧しい日本にいないで来い」と言うので、兄二人は叔父を頼って渡ったわけです（一九二二年発行『在米日本人々名事典』によると、大力房吉は奥海田村から〇六年に渡りサクラメント郊外で食料雑貨店を営んだ）。長男の要（一九〇一年生まれ）は、子どもを大力の父母に見せるために帰国して真珠湾攻撃が起きて戻れずじまいで

した。

兄弟のうち米国にずっといたのが、この農武一です。戦争中は（西海岸に住む日系人の強制収容で）ソルトレークですか、冬は塩水も凍るひどい所へ送られ、要の下の子がそこで死んだのも手紙で知っておりました（ユタ州トパーズ収容所とみられる）。農武一は戦後にレストラン経営で成功し、実家へいろんな物資を送ってくれました。私が被爆者として来ることへの批判を案じ、警戒感も持っていた



カリフォルニア州サクラメントでレストランを営み、別邸に日本庭園を設けていた兄の大力農武一夫妻。

ましたが、兄嫁のお母さんも空港に来て大変な歓迎でした。サクラメントの仏教会でのスピーチでは、私が一番心を打ったと褒めてくれました。

「カリフォルニア州最古の日刊紙」と

題字に刷る「サクラメント・ユニオン」五月一日付は一・六面で、松本団長やミセス阿部らと副知事との面会写真を「地獄からの帰還のような原爆からの生存」「平和を求めて州都を訪問」の見出しを取って掲載。阿部の「皮膚を剥がれ耐えがたい痛み」との証言や、戦地から戻った夫と二男一女の親となったこれまでの半生、サクラメント在住の兄トーマス・ダイリキとの喜びの再会を報じていた。

―阿部さんらの「南コース」第二班は、テキサス州へ向かう途中の五月二日サンフランシスコに着き、巡礼団を受け入れた平和団体が名所のゴールデン・ゲート・パーク（金門公園）で、バーベキューやフォークダンスの催しを開き、団員も楽しんだと同行記にあります。ダンスはされましたか。

阿部 いいえ、重大な使命を持って行ったのですから私は浮かれて踊ったりはしませんでした。物見遊山の気持ちは全然なかった。それに私は人妻ですから。米

国でも目立たんようにしております。

―「旅日記」を繰ると、翌三日の日曜日は南部テキサス州ダラスへ飛び、教会でスピーチをして、支援者の車で州都オースティンへ移動、市民約20人と夕食を取りながら体験を語り、質問に答えています。四日は地元の新聞社で取材を受け、バスでダラスに戻って空路、中西部ミズーリ州カンザスシティへ。まさに強行軍です。

阿部 米国は大きく、広いし、休みはなかなか取れませんでしたね。

―スピーチは日本語で書いて臨んでいたのですか。

阿部 原稿なしで話すこともありました。私の通訳は、広島出身の藤井敦子さんという、国際基督教大の学生さんでした。高校の時に留学されておりました、発

音がよく、
行く先々で
褒められて
いましたよ。
通訳の人た
ちは学校か
ら選ばれた
そうです。

彼女は平和

巡礼のことを卒業論文にしました。結婚されて横浜にお住まいで年賀状のやりとりが続いております。



1964年5月21日米国オハイオ州コロンバスの宿泊先となったフランクリン家で。左が阿部、右は巡礼団通訳の藤井敦子さん。撮影者のアイアーマン・フランクリンさんは写真館を営んでいた。

―宿泊・食事を提供するホスト家族にも原爆のことを進んで話されましたか。

阿部 いたしました。食事をする時も、こういう手ですから皆さんにね、手がこ
うなった説明をしました。箸を持つている姿を写真に撮って、「箸運びが優雅」と
かおっしゃる。この不自由な指を思うとね、「何が優雅か」と心の中では反発もし
ました。しかし、受け入れてくださる皆さん方が、私を慰めようとしている、慎
み深く信仰を持っていらっしゃるのが、だんだん分かりました。泊めてくださる
家のご主人は食後に後片付けをされ、家でアルコールを召し上がらない。大学や
留学で空いている子どもさんのベッドを使わせてもらいましたが、日本のように
冷たい布団を敷いて休むようなことはございません。とにかく皆さん、心も豊か
なハイクラスの方でした。

―旅を共にしたバーバラ・レイノルズさんはどんな方でしたか。

阿部 とにかく平和主義者、人間愛に満ちた方でした。温かく、人当たりのよい、お母さんのような人です。バーバラさんとの会話は藤井さん、彼女がいない時は芝間先生（広島で英語塾を営む団員の芝間タツ）に通訳をしてもらいましたが、私だけでなく皆さんにもそのように接しておられるように見受けました。

―そして、いよいよ五月五日には、広島・長崎への原爆投下時の大統領だったハリー・トルーマンと面会します。「旅日記」でこう書かれています。

「2時より松本団長との面談あり。終始にこやかな会談であつたけれども、実のないあつけない面会なり。80才とも思えぬ元気さである。原爆使用についてはいけない事だと思ふ、それについて国連を強化して自分の責任において何とかするから見ておれとかの会談であつた由^{よし}」

元大統領との会見はカンザスシティー隣町の郷里インディペンデンスにあるトルーマン記念図書館の講堂で行われた。面会は巡礼団が申し入れた。「世界の中のヒロシマ」によると、団長の松本卓夫と壇上で握手し、「あの当時、双方で五〇万以上の死者ともっと多くの負傷者を出さないよう戦争を終結させるのが目的だった。それを使わなければ仕方なかったということだ」と述べた。阿部や後述する高校教諭の森下弘（当時三三歳）ら被爆



1964年5月5日、世界平和巡礼団を代表し、ハリー・トルーマン元米国大統領（手前）と会見した団長の松本卓夫さん。
（原爆資料館所蔵の「松原美代子資料」から）

者七人が椅子席で見守った。

―トルーマンと会って、今も記憶に残る思いはどんなことでしょうか。

阿部 この人が原爆の使用を命じたんだと考えながら見つめておりました。被爆者ばかりが来とるのに、私たちに頭を下げるでもなし、謝るでもなし、肩透かしされたような気がしましたよ。

―拍子抜けした、と。怒りが沸いたということはなかったのですか。

阿部 原爆で大けがをした今も苦しんでいる人が目の前におるのに、ことわりはなかった。何も言うことがなかったんですよ。人間はね、心にないことは言えません。だからトルーマンさんも（原爆使用は）当たり前のことじゃあと思っておられたんですよ。やっぱり、われわれ被爆者は、期待する気持ちもあつたかもしれ

れませんが、むなしい気持ちで帰りました。



県立広島一中三年の夏に建物疎開作業に動員されて鶴見橋の西側で被爆した、森下弘は「平和巡礼報告」（一九六五年発行の『廿日市高校教育研究年報第五号』収録）でトルーマン元大統領との会見をめぐり、「質問を用意してはじめはさすがに動悸どつきがしたのに、団長と壇上で握手して二、三応答が交わされただけで、全くあっけない感じだった」と記している。

日本は高度経済成長期にあったが、全国的な新聞・通信社や放送局の特派員は米国でも少なかった。会見は、同行した「カンザスシティ五日満井本社特派員」発の記事（中国新聞一九六四年五月七日付）で広島へ届く。「地元の夕刊紙は一面に巡礼団の様子を詳しく報じ」、NBCなどのネットワークで「全米にテレビ放送

された」と反響ぶりも伝えている。

では実際、米国の代表的なメディアは元大統領が被爆者と会った内容をどのように扱い報じたのだろうか。ニューヨーク・タイムズは、会見の翌五月六日付で「トルーマン 原爆生存の日本人八人を歓迎」の見出しを付けて、現地発AP電を載せていた。写真は付いておらず扱いは小さい。全文をみる。

「広島、長崎で原爆を生き延びた日本人八人が、第二次大戦を終結するため原爆投下を命じたハリー・トルーマンに昨日会った。一行は、四人の通訳者とインディペンデンスにあるトルーマン図書館で面会した。トルーマン氏は訪問者へ次のように語った。『あなた方を迎えられてうれしい。図書館内を見て、わが国が提供すべきものは何かを分かっていただけるのは幸いだ』。松本卓夫、七六歳、東京に近い静岡の女子短大学長（静岡英和女学院長）が一行を代表してトルーマン氏にあいさつした。『戦争中とはいえ、あの決定はあなたの役目において非常に重い

責任だったろう』。トルーマン氏はこう述べた。『双方で五〇万人以上の死者と負傷者を出さないように戦争を終わらせるためであった』『戦争を指導する時の目標は勝つことだ。(戦後は) 私たちに恨みがないことを示してきたと思う』。

これに続く最終段落は「世界平和巡礼の一行が四月二一日に東京を出発し、会見の当地からセントルイス、オハイオ州などを回って来月七日パリへ向かい、東西ベルリン、モスクワへ行く」計画を紹介していた。



―国内に時差もある米国を飛行機や支援者の車、バスを乗り継ぎ、全く見知らぬ土地で証言をする。泊めてもらった民家では、通訳がいるとはいえ、ナイフとフォークで食事をしながら話す。そんな中で「旅日記」がよく続きましたね。

阿部 他人さまにお目にかけるもんじやないから、あったことを忘れないように

ただ書いただけです。特別な使命をもって行きましたから書き留めておかないといけない、そういう責任感もありました。また、ご近所の方やらハワイの親戚や海田ゆかりの方々、サクラメントの兄家族から心遣いをいただき、帰ってからお土産話や、お礼をせにやあいけんとも思っ書いたんです。

―「あつけない」と記したトルーマン会見の翌五月六日は、カンザスシティー大でスピーチをして、聴衆からの質問と返答も書き残しています。今日に続く核兵器を巡る米国民の「原爆観」や葛藤もうかがえます。

阿部　　そうですか。どうぞ、お使いください。

米市民　「平和があると思ふか、自分はあると思ふが？」

阿部　　「全面軍縮のなされない間は本当の平和（は）ない。平和そうに見え

る丈^{だけ}である。それでこそ我々が今日こうしてはるばると出掛けているではないか」(前年の一九六三年、米英ソ連の三カ国が地下を除く大気圏内、宇宙空間および水中での核実験を禁止する「部分的核実験禁止条約」にようやく仮調印していた)。

米市民 「資料館等^{など}へ原爆の時の資料を展示して恐怖を伝えることをどう思うか？」

阿部 「我々の生きている間は語り伝える事も出来るが、我々の命にも限りがある。完全軍縮のなされる時までは必要だと思っている」

続いて「平和運動をやりたいと思ふけれど、米国ではすぐ共産思想保持者とまちがえられ見られる」「現行政治なら、かつての様なパール・ハーバ(真珠湾攻撃)の様な事件は起きないと思ふか」との質問を書き留めている。

―旅の先々から一々（約四〇円）切手を貼って便箋・封筒が一体のエアメール（航空郵便）を夫の三郎さんへ送られています。しかも長文の手紙です。数えたら二二通ありました。

阿部 無事に旅を続けているのを伝えるには手紙しかなかったですね。家のことも心配でした。育ち盛りの子ども三人を置いてきましたから。主人は子どもたちの様子を小まめに記して、私への励ましもたくさん書いてよこしてくれました。孫がかわいい姑さんは、修道高へ通う一番上の子に弁当を作って持たせてくださいました。大変だったようです。

―ご主人への手紙では、手応えも愚痴も余すことなく書いています。被爆証言を言葉も文化も異なる地で伝えるやりがい、困難さ、市民によるプロジェクトの舞台裏が図らずも浮かび上がってきます。抜粋して旅をたどります。

阿部 主人が取っておいてくれたものがお役に立つならうれしいです。

ミズーリ州カンザスシティー 五月七日投函

「昨日トルーマンに会ひました。私は言葉が分からないのが大変心労の種になっていきます。子供達には何とか通用する様よう、学まなばせたいとつくづく思っています／私はもう帰りたいです。皆そう言っています。第二グループのメンバーと三日に一度くらい会いますが、脂まわこい料理を頂く国へ来て皆、脂の抜けた顔をしています。今からヨーロッパを廻まわるのかと思ふとうんざりします。四日に二日くらいは休みがある約束でしたが、今のところ全然土曜も日曜もない毎日です」

ケンタッキー州レキシントン 五月一六日投函

「人口十五万人くらいの南北戦争の激戦地であつたと云いふ此この町は…セ

ントルイスを七時に出て実に十二時間バスに乗り続けて／サクラメント以来、米のご飯は食べたことはありませんけれどなれました。毎日少なくて二回多くて四回くらい同じスピーチ事をやって暮らしていると、あきてきました。

（通訳の）藤井さんもうんざりしているでしょう／こちらでは上流社会のお宅へ泊めて頂いています。立派づくめで話しになります／けれども私の世界で最も愛する者五人が待っていて呉くれると思ふと一日も早く帰りたいです／此の国の人は礼儀を心得て人の痛いところにさわったり、じろじろ見ません」

オハイオ州シンシナティ 五月二一日投函

「貴方あなたから送って下さい／『私共の口を通し語る原爆の惨状を体験を一同我が事のように涙を持って聞いて下さり、亡き方々に代わって広島長崎の被爆者に代わって、心の底からの訴えが出来ました。そして本や新聞ではいろ

いろ広島長崎の様子を聞いているが、私共から聞いた程身^{ほど}に迫って感じたこととはない。よくぞ勇気を出してここまで来て下さったと会ふ人毎^{ごと}にはげまされ、旅を重ねる毎に勇気づいている一同です』。こちらでは朝日の特派員等一人も会ひません」(夫が朝日新聞記者から平和巡礼の様子を尋ねられたことへの返信)。

ウエストバージニア州ホイーリング 五月二四日投函

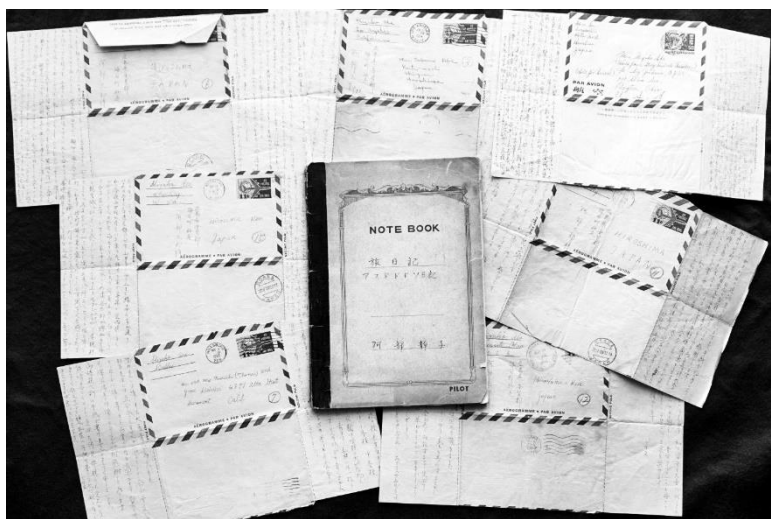
「今日の会合で正式に発表がありました^{よし}が、レイノルズ婦人はオハイオにあった自分の土地を全部売って資金に当てられた由／レイノルズ一家のごくろうを思へば孤独等なんのそのです／ヨーロッパ行きの事は天に任せて一日一日を最善の努力をしようと考えています」(資金難から欧州行きのメンバーを選考する事態が持ち上がった)。)

首都ワシントン 五月三〇日投函

「ワシントンで第三グループ、第一グループと合流しました。皆疲れた顔をしています／今日二時から全員集まって大切な発表があるそうです。多分ヨーロッパ行きの人選についてだと思ひます」（「旅日記」によると、阿部は二八日首都に着き、心理学博士宅で泊まった翌日は郊外の「黒人学校、白人小学校、中学校」の三校で証言をした）。

ペンシルベニア州フィラデルフィア 六月四日投函

「ここではクエーカー教徒の方々の合宿所の様なところへ一同泊まつて全く何の予定もなく休養の一日を送っています／昨日平和巡礼の財状と渡欧人員の中八名が発表されました／それぞれ国情のちがふ国々で、日本人以上に戦争体験の深い人々との間に入って原爆体験に基づく平和論をぶつのは相当地に平和運動の歴史も動きも信念も必要な事だと思ひます。バーバラさんも実に無理な行動を起こされたものと一同この地へ来て顔を見合っています／



阿部が世界平和巡礼団としての行動や思いを一日も欠かさず付けていた「旅日記」や夫三郎とやりとりした書簡。

米国を横断した丈でも私には上出来だ
 だけ
 と考えています」(英国などの支援組織
 から招請を受け、まず第一陣二〇人が
 六月七日米国を出発する)。

— 旅先からの手紙に夫の三郎さんは、
 ニューヨークの平和巡礼団事務局宛
 てに何度も達筆な字で手紙を送って
 います。「孤独にならないようお願い
 します」「帰ったら電話を一日でも早
 く家へつけるよう二人で努力しまし
 よう。電話がこれからのお母ちゃん

の活動に一番大きな利器になるでしょう」「フィルムを写し始める時、巻き戻しクランクが廻っているかを、よく注意しないと」。妻の平和活動を励まし、心身を氣遣つておられたことに頭が下がる思いがします。

阿部 向こうの家庭に泊めていただき、驚いたのがお金持ちのご主人でもエプロンを着けて食器を洗ったりする。米国は進んでいました。主人は家では縦の物を横にもいたしません。威張っていました。でも心は優しくかったです。主人が亡くなり、子ども優しくしてくれていますが、主人が一番私を思つて接してくれたなあと。夫の愛は深かったと思つております。

平和巡礼団は六月八日、米国での最終講演会をニューヨークのカーネギーホールで開く。松原美代子の琴演奏で始まり、松本卓夫が「人類を絶滅に導く愚かな行為をしてはならない」と原水爆の禁止を訴え、「広島折鶴の会」世話人の河本時

恵が「宗教、人種、国籍の違いを超えて平和のために協力しましょう」と呼びかけた。人気コメディアン^デの出演もあって約一二〇〇人が集まり、巡礼団へのカンパは五〇〇〇^ポド（一八〇万円）に上った（中国新聞一九六四年六月一〇日付）。

松原美代子は一九六二年の第一回平和巡礼に続いて参加し、八二年には市民が描いた「原爆の絵」を携えて全米各地を回る。その後も証言活動が続けて二〇一八年に八五歳で死去。出演したのは、公民権運動で揺れる米国の政治・社会を鋭く突いたセントルイス出身の黒人スタンダップ・コメディアン、ディック・グレゴリーだった。自伝は邦訳もされている。

―阿部さんは欧州へは第二陣の出発となりニューヨークにいました。「旅日記」に「着物を着て6時迄^{まで}カーネギーホールへかけつけた」一同を集めてリハーサルである」と書き留めています。あの有名なカーネギーホールのステージに上が

られたのでしょうか。

阿部　あまり覚えておりません。私は田舎者で芸も何もございませんで、これといったことはしなかったと思います。

―集会の直後に夫の三郎さんへ宛てた手紙ではこう伝えています。

ニューヨーク　六月八日投函

「カーネギーホールでお金集（め）をするのに顔に傷のある者ばかり残ったわけで一同不満に思っていますあが、或る意味から云いえば、それが意い図図で我々は選ばれたのです。訴える力を持っています。今少しの我慢です。だまっています。何事も氣持の持方一つです。悪くとらないで……貴方が考ほえている程世界旅行は甘くも楽しくもありません」

阿部　忘れていました。自分の手紙を読み返してもおりませんし。広島を発す

る時、皆さん立派な方々ばかりですから、私なんかでいいのだろうかと思ひながら、「生き証人」として人のできないことをやらせてもらおう。そう決意して、一緒にしていました。だから旅を続けられたんだと思います。

―三日後の一日には、国連本部でウ・タント事務総長と会い、国連放射能委員会が原爆の影響について調査するよう要望書を提出します（共同通信ニューヨーク発の記事では八人が訪問）。阿部さんの「旅日記」には「平和の子の像を渡し、ありがたいお言葉を頂き帰った」と記して、「原爆の使用はどこでどの様な理由においても許すことは出来ぬ」「核兵器保有国に実験禁止を認識させる」など事務総長の発言を書き留めています。

阿部 国連での実感は全く残っていません。付いていただけです。

―日本と戦った元兵士らが健在であり、原爆使用の正当化論が一般的だった六〇年代半ばの米国で、原爆による惨禍や放射線障害が続いていることを伝え、原爆の禁止を訴えた。人々の暮らしや息遣いにも触れました。米国巡礼で忘れられない記憶は何でしょうか。

阿部 一番に、日本の子どもたちのことを思い出して涙が出るほど豊かな国でした。こんな国と戦って勝てるわけがないと思いましたよ。訴えが届いたかどうかは分かりませんが、私のやけどの傷を見て、「まだ、こういう人がいるのか」と目を見張っていました。原爆に対する認識を少しは改めているように思いました。日本では「赤鬼」と言われたり、姑さんから離婚を迫られて入籍が遅れたり、いろいろありました。そういうことがあって、米国の方たちに優しく真心から迎え入れてもらい、日本で凍った心がすっかり解けていく気がしました。米国の方もそうですが、日本の若者にも、どこの国の人にも私のような目に遭ってほしくな

い。そのためには、核兵器の廃絶がとても大切なことだと強く思うようになり、私なりの活動へとつながったと思います。

― ニューヨークにいた阿部さんら二〇人は六月一二日にジョン・F・ケネディ国際空港を飛び立ち、オランダ・アムステルダムを経由してフランス・パリに入ります。英国ロンドンで活動していた先行グループとパリで合流します。欧州になると三郎さんへの手紙が見当たりません。

阿部 送っていない気がします。米国で見たり聞いたりしたことほど伝えたいようなことがなかったんでしょうね。疲れてもいました。

― 「旅日記」は一日も欠かさずつけていますが、確かに「眠くて仕方がない」と。

一四日は「広島憩いの家」を創設したアイラ・モリス夫妻の邸宅に招かれ、一

六日にはサーカスで有名なパリー一区のシルク・デイベール劇場を会場に科学者らが開いた集会で、阿部さんから被爆者五人が証言をしています。「2000人の大集会であるパリーの大集会である」と記していますが。

阿部 よく覚えておりません。欧州で覚えているのは、ユダヤ人（強制）収容所を訪ねたことです。殺された人たちの髪の毛が、山のように茶色やら何やら積んであつて、履いておられた靴がまた山のように積んであつて。そこへ入ったら何とも言いようがない臭いがした。とても複雑な気持ちになりました。

平和巡礼団はベルギー国王に招かれた一〇人を除く一行が一七日西ドイツへ入り、冷戦の最前線でもあった東西ドイツの両ベルリンで討論会や会合に臨む。一九日には、東ベルリン郊外のザクセンハウゼン収容所を訪ねていた。阿部の「6月19日 金 東 ドイツ民主共和国」の日記をみる。

「人間の手によって人間が殺され人間が人体実験に使用された事実を説明され、当時の記録映画を見、解剖室、死体保存室、実験手術室。一度に8人を入れられて焼く事の出来る人体焼却器が40も並んでいる。火葬場等を見た気のせいでもなく、たしかに一種異様なにおいが収容所全体に立ちこめていた。そのにおいは、かつてユダヤ人が苦しみ悲しみのろい^{なが}乍ら死んで生き残した死臭であるように思へた／我々も広島長崎で多くの死者を出し、うらみ、のろって暮らして来たけれど、一度にぱつと殺され焼かれたのである。1人1人が1人1人の人間の手と心によって殺された事実には心から怒りを感じた」

―欧州に入ってから「旅日記」は、「夜遊びもはなはだし…朝から気分が重い」

と、同行通訳らの行動に不満を抱いていたことも書いています。

阿部 ホストのアパートで朝まで心配したり、腹を立てたりしながら、我慢、我慢でした。若い学生さんたちですから。フランスやドイツでは英語は通じないし、することがほとんどないので、暇を持て余したのでしょうか。一人となり駅で迷ってしまったこともありました。旅は甘くありません。

―冷戦のリアルさも書き留めています。東ベルリンの検問所で団員が気軽にサインをしたあまり「日本の平和使節団が東独の壁を支持したと公表」され、「西ベルリン市長の歓迎レセプションも断われ」た（六月二〇日記）。「女性代表8人」が日本人宅に招かれて「海苔^{のり}むすびに冷そうめん」を食べた後、「ソビエトへ全員が行くかどうかについてひそひそと話し合った」（同二二日記）。復興が進まず弾痕が生々しい国営アパート、野菜も朝から並ばないと手に入らない東

ベルリンを垣間見て、共産圏の総本山へ行くことに不安があったのでしようか。

阿部 それは、良識のある人はいろいろ考えられたと思いますよ。でも、私はその他大勢の一人ですから深くは考えてはおりません。米国では兄嫁さんらが「脂っこいものばかりでお困りでしょう」と煮しめや白あえをこしらえてくださいました。欧州へ行ってからは食事も口に合わず、寝不足やら何やらで疲れていたんでしょう。モスクワでは証言することもなかったと思います。

平和巡礼団の一行は、資金不足から飛行機の手ケットを清算し料金の安い列車に切り替えて六月二六日深夜モスクワに着く。駅ではソ連平和委員会や日ソ友好協会のメンバーが出迎えた（「世界の中のヒロシマ」）。

阿部の「旅日記」によると翌日は託児所を見学して「婦人平和委員会」代表と会食し、夜は四幕三時間に及ぶポリショイ・バレエを観劇。その後もロシア革命

指導者の遺体を防腐処理して赤の広場で安置・展示しているレーニン廟など組まれている観光をこなし、ソ連人民へ証言する機会が訪れた。

「6―29 月 モスコ― 午後病院見学。一方的な説明ばかりしたのを聞いた。完全国家支払で病気は治療されている由。^{よし}午後労働組合に行き、これも聞く一方の会合であった。労組の元祖丈^{だけ}あつて何も彼もよく管理されている。夜8時より野外音楽堂で（ゴーリキー）楽公園（ゴーリキイ公園）一般大衆向けのミーティングあり。庄野、田吉、岩永、満井氏スピーカー。終わりには4人が重複することが多いので客が散つて行った。12時床につく」（庄野直美は広島女学院大教授、田吉チエは長崎県母子相談員、岩永兼密は福岡県で発行の夕刊紙フクニチ記者）。

「6月30日―7月1日 モスコ― ハバロフスク 9時間飛び／ハバロ



1964年7月4日、米国から欧州、ソ連を回り、旅客船で横浜港に着いた一行。阿部は前列右端、同5人目は団長の松本卓夫さん、その左にバーバラ・レイノルズさん。(森下弘さん提供)

フスク着。7時間時差があり午前7時30分である／空港で朝食をとり日本人死没者の墓へ詣でる／ホームシックにかかり、やたらと帰国したい気になっていた時も時、この異国の地で不自由なふりよ生活を送り、はるかな日本に思ひをはせ食物も思ひにまかせず亡くなられた若いみたまに心からめい福を祈った／暗い気持ちで又空港へ帰る。昼食後2時発ナホト力行き特急の人となった」

―極東ナホトカから七月二日に日ソ定期旅客船に乗り、四日横浜港に着きます。

阿部さんは五カ国を巡りました。二カ月半に及んだ「旅日記」の締めくくりは、

「丘山さんが来てくださっていた。嬉うれしかった事、嬉しかった事、もう少しで泣くところであつた」とあります。

阿部 丘山ひろみさん、東京の武蔵野音楽大の学生さんでした。歌にもなった私の「悲しみに苦しみに」が広まった頃、富山県から届いた被爆者への慰問品を町内会で分けると、ひろみさんの小さい時の洋服があり、娘の寸法に合うのでいただきました。お礼状を出すと文通が始まり、手編みの手袋なんかも贈っていただきました。大学生になると（一九六三年に）広島を訪ねてくださり、原爆ドームをご案内しました。出発時には羽田空港まで見送りにも来てくださった。その後もお付き合いをいただき、優しい方でしたが三年前に亡くなられました。

―広島へは二人が七月五日に急行「安芸」で戻ります。翌日には「市民への帰国報告集会」が平和記念館（原爆資料館東館）で開かれ、阿部さんは「家庭の主婦でもだれでも、平和のためにやろうと思えば、何かができる。またやらなきゃならないということが分かりました」と述べています（中国新聞一九六四年八月一六日付）。東京や京都での原水禁市民大会や、地元の海田東小PTAでも巡礼の写真を見せて報告したことが「旅日記」の大学ノートに残っています。解消するはずだった巡礼団は「世界平和研究会」の名称で活動が続けることを決めたと報道（同一二月二六日付）されましたが、実際はどうなったのでしょうか。

阿部 誘われて何回か参加しましたが、研究会は続かなかったと記憶しています。広島の方はお医者さまとか、大学の先生とか、私には偉すぎて歯が立たなかったですよ。でも、長崎からの方とはお付き合いが続きました。旅の道中とても親密

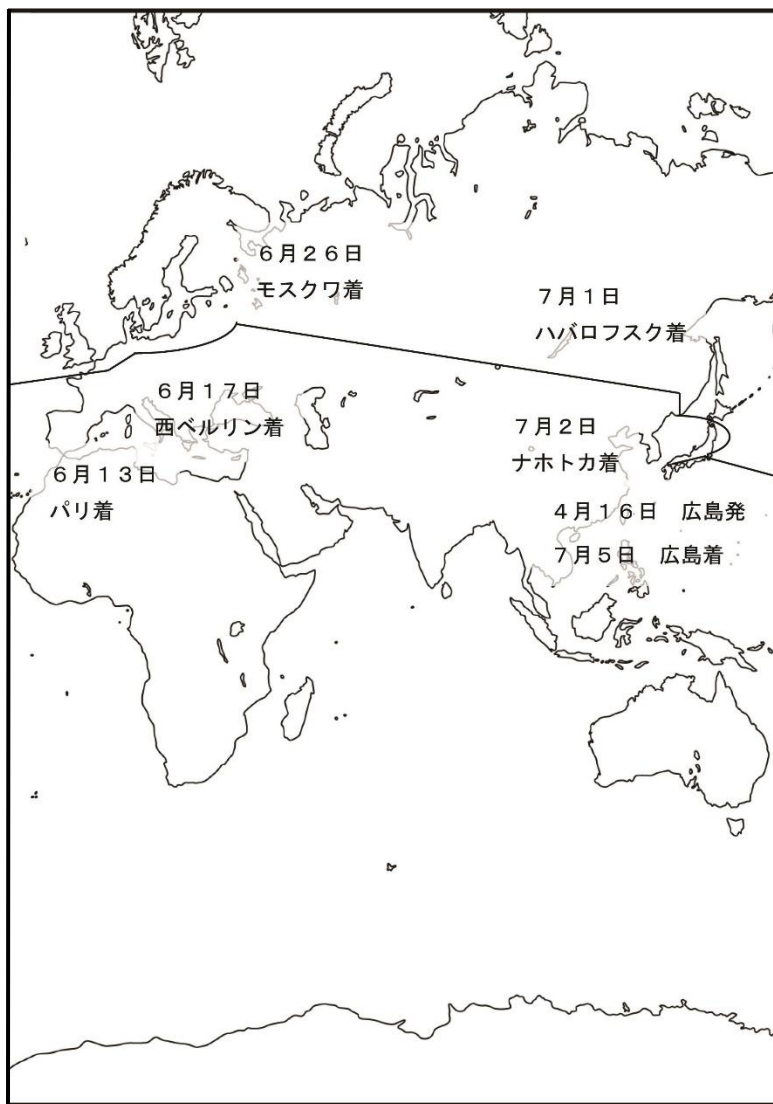
になった田吉チエさん（当時五八歳）、高原弘子さん（同三二歳、病院ケースワーカー）、小佐々久仁子さん（同二〇歳の最年少メンバー）です。高原さんは、九州へ次男がバイク・ツーリングした時に一夜の宿をお願いしたら快く泊めてくださって。その後も何かと気にかけてお手紙をくださいました。

小佐々さんは私の家をたびたび訪ねてください、子どもらとワラビ採りにも行きました。『生きていてよかった』という映画がありましたよね（被爆者の悲痛な日々や強く生きる姿を収めた一九五六年公開の記録映画。監督は亀井文夫）。小佐々さんも写されたく、それを見た原田（東岷）先生から「植皮手術にお越しく下さい。治療費はいただきます」という手紙を受け取ったそうです。広島とのご縁が深まって女学院大へ進まれ、広島大の先生との結婚式にもお招きいただきました。私の家へ米国の方が来られた時も通訳をしてくださり、とてもお世話になりました。この春、久しぶりに人前でお話をした時も東広島市からわざわざ

ざ来てくださいました。岩谷さんといいます（二〇二四年四月一日、WFCが開いた「世界平和巡礼60周年記念パネル展」でのギャラリートーク。翌日は九三歳となった森下弘が証言した）。私はいろんな素晴らしい方たちとの出会いを得て、この年まで生かされてきたと思います。



地図2 「広島・長崎世界平和巡礼」
阿部の訪問地名略図



4 被爆体験 証言者



2009年2月22日、民族対立からの内戦で荒廃したスリランカ東部の復興を担う行政官やジャーナリストに被爆体験を証言し、握手を交わす阿部。（中国新聞撮影・提供）

原水爆禁止運動は「いかなる国の核実験にも反対する」かをめぐって社会党と共産党との路線対立が先鋭化して分裂した。一九六四年、被爆地広島では同名の二つの県被団協に分かれて今日に至る。被爆者運動も党派・労組の主導権争いに巻き込まれた中、阿部静子は証言活動に力を注いでいく。

―「世界平和巡礼」から戻った翌月の一九六四年八月五日、広島、長崎、静岡県原水爆被災三県連絡会議の原水禁大会が基町（中区）の県立体育館で開幕します。森滝市郎・広島県原水協代表委員の基調演説に続き、阿部さんによる「被爆者の訴え」など三つの特別報告がありました。原水禁運動が分裂した中で、どんな思いを抱いて証言されたのでしょうか。三県連絡会議は翌年に結成される原水爆禁止日本国民会議（社会党・総評系）の母体となります。

阿部 このような体になったことをしっかりと自分の言葉で話し、被爆の実情を

一人でも多くの方に知っていただく。その一念でした。私は社会党だからとか共產党だからで大会に参加するのではなく、「原爆党」として証言をいたしました。原水爆の禁止を訴えるのは人間なら当たり前のことですからね。県庁勤めの主人も参加をとがめなかったし、気にもしていませんでした。

広島や長崎で原水禁世界大会が開かれ、参加者の優しいまなざしや言葉から私は元気をもらいました。差別をなくす人間としてお付き合いをいただきました。「いかなる国の核実験にも反対する」と森滝先生たちがおっしゃったのは当然のこと。海田町原爆被害者会は分裂することはありませんでした。

―原水禁運動が混迷から停滞へと陥る中で、阿部さんは大会で証言をしておられませんか。一四年ぶりの統一大会となる一九七七年原水禁世界大会を前に、「運動に不信を抱き、離れていった」一人として「被爆者の心が再び踏みにじられな

い統一であってほしい」と求めています（中国新聞一九七七年八月三日付）。

阿部 その頃、家のことや畑仕事で忙しかったこともあります。お姑さんは、私のことは憎いんだけど、孫はかわいがってくださいました。いろいろありましたが同居を続けて見送りました（阿部ナエは一九六六年に七五歳で死去）。主人は子どもたちに教育をつけさせることを望み、私は自給自足で暮らせるよう農作業に努めました。教育費はかかりますからね。三人の子を大学・短大にやり、長男と次男は希望した東京の大学へ行かせてやることもできました。子どもたちが皆、家を出たり、結婚したりしてから、整形手術を受けました。ええ、原田病院です。親しくなっていた東岷先生が「阿部さん、やってあげるよ」と手術を勧めてくださっていました。

外科医の原田東岷は一九四六年に復員した広瀬町（中区）で開業。手探りで始

まった被爆者治療を医師仲間と話し合う「土曜会」を設け、五三年の広島市原爆障害者治療対策協議会の発足にもつなげた。ケロイドに苦しむ独身女性二五人の五五年渡米治療に付き添い、六〇―七〇年代はベトナム戦争で負傷した孤児の治療支援活動も推し進めた。九九年に八七歳で死去。

―日本は「原爆乙女」、米国では「ヒロシマ・ガールズ」と呼んでいた一九五五年の渡米治療はどんな思いで見ておられましたか。まだ二八歳でした。

阿部 ケロイドのある若い女性は、あの頃は「原爆乙女」と呼ばれていましたが、私は人妻だったので（渡米治療の募集に）手を挙げていません。米国へ渡ってケロイドが目立たないように治療を受けられ、よかったと思いますよ。祝福しました。私は「原爆乙女」ではなく「原爆人妻」。子どもたちが家におるのに母親が入院を繰り返すと、どんな影響を及ぼすかと思って、三人の子が大きくなるのを

待っていました。五〇歳を過ぎても、まだ口の右下が突っ張って、食事にも困っていた。手もこれくらいしか伸びませんでした。それで、顎の皮膚を、この口に植皮して上がるようにしてもらったんです。東岷先生は優しかった。優しい人が私は大好きです。

―お子さんたちが独立し、手術の後ですか、表だって証言を再開されるのは。新聞報道をたどると、原水禁日本国民会議が一九八三年夏に開き一一カ国の海外代表も参加した原水禁大会の開会総会で「世界のどの国でも再び核の犠牲者を出してはならない」と呼びかけています。欧州の動きに刺激されて政党・労組の主導ではない市民による反核運動が高まり、八五年三月二一日の「平和のためのヒロシマ集会」（平和記念公園など市内七会場で開催、主催者発表で約五万三〇〇〇人が参加）では、竹下虎之助県知事や荒木武広島市長の激励のあいさ

つに続いて、「被爆者が生きていてよかったと思える時は、（被爆者）援護法が制定され核兵器が廃絶された時」と訴えています。

阿部 私には何党だから、どこの団体だから受けるとの考えは全くございません。申しましたように「原爆党」ですから。来てくれと言われれば行きますし、こちらへと求められれば参ります。被爆者の務めとして証言をしております。

被爆四〇年の一九八五年には、被爆者の援護事業に功労のあった人に対する厚生大臣表彰を桧垣益人らと受けた（広島被爆者関係は五〇人の計九二人）。また、日本被団協が核保有五力国へ核兵器廃棄の国際条約締結を要請する代表団を派遣する事業では、医師の肥田舜太郎被爆者中央相談所理事長らと一〇月一九日フランスへ向けて成田空港から飛び立った。

―広島を訪れる修学旅行生への証言活動は、どんなきっかけから取り組まれていったのでしょうか。

阿部 高橋（昭博）さん（広島市立中二年の時に中広町の校庭で被爆。市職員となり一九七九―八三年原爆資料館長。二〇一一年に八〇歳で死去）に頼まれたんです。何でも「東京・板橋区から修学旅行生を広島へ送ることになり、被爆者がどんな話をするのかを聞いてみよう」と保護者たちが来る。僕一人じゃ心細いから阿部さんもやってよ」



2001年3月10日、原爆資料館で開かれた広島、長崎、沖縄からの若者らによる学習交流会で被爆体験を語る左から阿部と高橋昭博さん。
（中国新聞撮影・提供）

と頼まれ、広島市内の小さな宿の広間で話をしました。正確な年は覚えていませんが、私が修学旅行生に証言を始めるきっかけでした。高橋さんは（一九五六年の）「国会請願」に参加されて昔から知っておりました。

東京都公立中学校の広島修学旅行は、山陽新幹線が広島へ開通した一九七五年に日野市立七生中が実施。それを知った葛飾区・上平井中教諭の江口保は翌年から取り組み、平和記念公園内外の碑前での証言を組み込んだ「上平井方式」を広げていく（二〇一二年発行『複数のヒロシマ』）。江口は八六年から広島に住み、全国からの修学旅行を支援した。九八年に六九歳で死去。

―長崎の被爆者でもあった江口さんの求めには応じられましたか。

阿部 江口先生からは何度もお誘いをいただきました。ただ、どうしても外での

証言になるんですよ。平和記念公園にも酔っ払いなんかいて、私が証言しようとするをやじる。それが嫌で、お断りするようになりました。原爆資料館であれば、部屋でじっくり聞いていただけるし、夏冬は冷暖房がありますから。

―市の財団広島平和文化センターが当時こう呼んでいた「被爆体験講話講師」を、昭和から平成となった一九八九年に引き受けています。当時は二人でした。

原水禁大会で証言をしていて、すんなり「講師」になれたのでしょうか。

阿部 どなたが決めるのか、役所のことは分かりませんが、高橋さんが推薦したんだと思います（高橋昭博は資料館長から平和文化センター事業部長に就いてた）。「阿部さん、やらんかね」と頼まれました。「どうしても都合がつかんから代わりに行ってくれ」ということもありました。新聞・テレビで有名な高橋さんでしたが、私を立ててくださいましたね。

―広島市長が会長を務める第二回世界平和連帯都市市長会議（現在は平和首長会議）の参加者や、国連軍縮京都会議で来日した二五カ国の軍縮担当者にも証言をしますが、「被爆体験講話講師」は一九九一年に退いています。

阿部 平成になって、主人に胃がんが見つかって手術となり、退院後も手があかなかったんです。県庁を退職してからは、畑仕事に精を出し、好きだった俳句に打ち込みました。全国大会で入選もしました。俳号「斗志」と同じ名の「斗志会」という、主人が会長をしていた戦友会（第八師団野砲兵第八連隊第九中隊の関係者で一九八〇年に結成）に晩年は私を何度か連れて行ってくれました。南洋の孤島から生きて帰ってこられた方たちが男泣きしておられるのを見て、よっぽどつらい思いをされただろうなと感じました。原爆で顔に傷を抱える私が出席したことでは、目が見えなかったり、片足を失ったりした奥さんも来られるよ



1970年代、夫の阿部三郎と海田町砂走の阿部家墓前で。
大力家の墓とともに生家近くの山裾に移設した。

うになりました。亡くなる年も山形県であった戦友会へ無理して出席しました。私は体調が悪く、娘が付き添って行ったのが、あの写真です。主人は私の活動を誇りに思い支えてくれて、最期まで大事にしてくれたと思っています。

阿部三郎は一九九二年八月三〇日、七三歳で死去した。妻静子が入居する「八景園」の居室は、最後となった戦友会への旅で長女と収まる写真

や、カラー化した婚礼写真を飾る。二〇〇三年発行の会報『斗志の絆』一〇〇号記念誌へは長男が亡き父の句作を選んで寄せていた。

戦陣の飢餓の思ひで日照り草

ヒロシマ忌死者の眼窩のみひらきて

―古希を過ぎて、修学旅行生への証言活動は本格化しています。一九九九年に平和文化センターの「被爆体験証言者」を委嘱され、八〇歳代に入っても精力的に続けられました。何が原動力になったのでしょうか。

阿部 うーん、私はね、何と言うこともないんですが、修学旅行生たちの目が一生懸命に私を見て、聞いてくださる。この人たちにはかわいいまま、美しいまま、肌を傷つけないで一生を過ごしてもらいたい。そうした思い、一念で話しておりました。私の傷を見て、原爆・核兵器がいに恐ろしいものなのか、なくさなく

てはいけないのかを実感していただきたい。そういう気持ちもございました。無我夢中でやっております。

—『原爆に生きて』で表された、辛酸をなめた日々は話さないのですか。

阿部 八月六日のことだけです。修学旅行生への証言はだいたい一時間内ですし、子どもですからね。学校でいじめたり、もましたり、そういうことはよくない、やめようとも伝えました。反応ですか？ 言いつ放し聞きつ放しで終わったような時もあります。でも、お手紙が来ると必ず返事を出しました。いつも受け止めたようなことが書かれていたからです。手応えを感じておりました。それで連絡があれば、勇んで出かけて証言をさせてもらいました。

こんなこともありましたよ。ある中学校の校長先生が「来年の今夜もこの旅館に来ますから阿部さんお願いします」と言われて、新しい年のカレンダーにも書

き込んで待っていたのに何の音沙汰もない。別の二校から依頼を受けたら、当日になって「うちは昨年から頼んでいた」と連絡がありました。一日で三回、重たい話をする羽目になりました。軽く扱われているなあ、とも思いました。それでも五月と一〇月は毎日のように、お誘いがあつて、行かせてもらいました。それでますます育てられました。

―育てられた、というのは。

阿部 最初の頃は壇上から降りると、あれを話せばよかった、これを話すべきだったと反省しきりでした。でも回数を重ねるにつれて自信がついて、原稿なしで一時間お話しできるようになりました。

―一口に被爆体験といっても、原爆に遭った場所や年齢、その後の生き方でも一

人一人違いますが、自分の言葉で語る、伝えられるようになった、と。

阿部 はい。原爆証言では、ちよつと自信を持つようになりましたね。

—南米エクアドルの大統領やイラク、アフリカ・ウガンダの外相、二〇一〇年には政府の「非核特使」として、広島を訪れた国連総会議長を務



2010年9月7日、外国元首で初めて国立広島原爆死没者追悼平和祈念館を訪れたエクアドルのラファエル・コレア大統領に被爆証言をした阿部。
(中国新聞撮影・提供)

める元スイス大統領にも証言をしています。修学旅行生とは違いましたか。

阿部 大差はございません。私が身に受けたこと、私が思ったことをお伝えしております。子どもたち、学生さん、指導者へも変わりなく話しております。通訳を介しても、やはりわざわざ広島へ来られて、話を聴こうという指導者はとても熱心に平和を求めておられました。お話ししてよかった。名誉に思いました。

―大学生には「広島・長崎講座」に呼応して早稲田大が二〇〇三年に設けた「21世紀世界の平和とは」で当時の秋葉忠利市長と講師を務め証言しています。

阿部 市長さんが先に話して、私が後からさせてもらって。あれは覚えとります。大学の講義はちよつと長いですし、三〇〇人もの学生さんがいたので、私も勉強になりました。明治学院大の先生は（キャンパスがある）横浜へ何度も呼んでくださり、留学生と一緒に広島へ来られるたびにも声をかけていただきました。私

ががんを患ってやめている間も、証言は可能かどうか、うかがってくださって、この「八景園」へも訪ねてくださいました。

「非核特使」は、二〇一〇年の広島平和記念式典と長崎平和祈念式典に参列した菅直人首相が、被爆者が「国際的な場面で核兵器使用の悲惨さや非人道性を世界に発信していただけるようにしたい」と述べたのを受け、外務省が一〇年から自治体や平和団体の申請により名称を付与して核軍縮関連業務を委嘱した。

「広島・長崎講座」は両都市が被爆者の訴えや核兵器の非人道性を学術的に扱う講座の開設を二〇〇二年度から大学に呼びかけ、被爆関連資料なども提供する。二四年度現在、国内五三校・海外二五校を認定している。

―証言活動は広島メディアでよく取り上げられます。ご自身が話される内容や

姿をテレビで見て、どんなふうに思っていましたか。

阿部 特にないです。傷だらけの者が出とるんですから。

—では、ご家族の反応は。

阿部 子どもたちはね、活動を応援してくれました。修学旅行で、この前G7があつたホテルへ何回も呼んでくださる学校があるんです（二〇二三年の先進七カ国首脳会議ⅡG7広島サミットⅡは南区元宇品町のグランドプリンスホテル広島が主会場となった）。あそこは交通の便が悪いんです。証言が夜になると帰るのが大変でした。タクシーで街中まで出て、電車かバスを使ったり、広島駅でJRに乗り換えたりして、またタクシーで（安芸郡海田町の）家へ帰るわけです。隣に住む次男が送り迎えしてくれて本当に助かりました。

―海田町原爆被害者会の会長を夫の三郎さんが亡くなった三年後、被爆五〇年の一九九五年に引き受けています。

阿部 県被団協の理事も務めました、会議にみえるのは、各地域のほとんどが男性の会長さんです。私の発言は一言で終わったように思います。若い頃に差別され馬鹿にされ、傷を負った顔で暮らしてきました。自分のことをあんまり評価しておりません。長年お付き合いをいただいた、伊藤サカエさんや、池田精子さん（広島女子商一年の時に鶴見橋近くで被爆。一九五六年の「国会請願」を共にした）のようにはいきません。先頭に立ったり、臆せずに行動したりする、活発な人間にはなれませんでしたね。

伊藤サカエは建物疎開作業に動員された鶴見橋のたもとで被爆。一九五六年の広島県被団協結成時から理事を務め、安芸郡矢野町議なども歴任した。八一年女



1999年1月20日、広島県被団協代表者会議に続いてメルパルク広島で行われた伊藤サカエ理事長（前列右）の米寿を祝う会で。左端が阿部、左から4人目は近藤幸四郎さん。右端は高橋昭博さん、右から2人目は坪井直さん。

性で初めて日本被団協代表委員となり、最期まで続ける。「国は原爆死没者に線香の一本でもいいから供え、悪かったといってほしい」と国家補償に基づく被爆者援護法の実現を求めた。二〇〇〇年に八八歳で死去。

しかし、阿部さんは広島県、日本被団協結成に参加した被爆者運動を切りひらいた一人ですよね。いわば後輩の男性陣に

遠慮しなくても、いいのでは。

阿部 まあ、そうではありませんけれど、私はあの、何というか、自分を卑下しておりますから大それたことは考えておりません。被団協を引退してりましたが、結成六〇年の時に坪井直さん（広島工専三年の時に富士見町で被爆。中学校長を退職後の九三年県被団協事務局に入り、二〇〇四年理事長、一〇年からは日本被団協代表委員を務め二〇二二年に九六歳で死去）から表彰していただきました。お手紙も賀状もくださるし、癒やされておりました。

県被団協が二〇〇一年に初めて編んだ『核兵器のない明日を願って―広島県被団協の歩み』は、阿部や池田精子、近藤幸四郎（修道中一年の時に皆実町で被爆。七四年に地域・職域の原爆被害者会をつなぐ被爆者団体連絡会議をつくり手弁当で事務局長を務める。二〇〇二年に六九歳で死去）、高橋昭博ら六人が、事務局長

だった坪井直の司会で「苦難の日々」から「ヒロシマの世界化」までを座談会で語っている。阿部は一六年に県被団協「功労者」として表彰された。

―海田町原爆被害者会は、二〇〇一年時でも「県内では会員数最大の組織」約一〇〇人だったのが、〇七年に解散しています。全国の被爆者の平均年齢は、今と比べるとまだ年少の七四・五九歳でした（厚生労働省調べ。二〇二四年は八五・五八歳）。何が一番の理由だったのでしょうか。

阿部 私の耳が遠くなり、今のうちに性能のよい補聴器もございません。県被団協の会議に出ても皆さんにきちんと報告するのが難しくなりました。ほかの方に会長さんをしていただこうと思ったんですが、ペースメーカーを入れられたり、人工肛門になったりして、引き受ける人がおりません。代わってやろうという人も出てこない。私どもの力不足で解散となったしだいです。

―会員数がもとと少ない他県の被団協では「被爆二世」に参加してもらうケ―スもみられますが、会としての活動継続は考えられなかったのでしょうか。

阿部 相談はしました。一世は被爆者への差別を肌身で知っているだけに「子どもにまでそういう目に遭わせたくない」、それが皆さんのご意見でした。私の息子や娘は幼い頃、「赤鬼」と言われた私のこの顔の傷のことでいじめられました。証言活動は応援してくれますが、原爆のことを私に代わって背負おうとは思ってはいないでしょう。二世の方たちに苦勞をかけたくはありません。

被爆者への援護でいえば、一世だけで十分にやってきたんじゃないでしょうか。原爆の惨禍のこと、核兵器のことは、私たち体験者が証言をいろんなところで続け、だいぶ知恵を絞って行動もして、たくさん種をまいたと思っています。その種が育って、あの条約（核兵器禁止条約）もできたと思っています。核兵器



2011年6月13日、原爆資料館南側の緑地帯でバーバラ・レイノルズさんの記念碑を除幕する阿部（前列右から5人目）や森下弘さん（同4人目）、長女ジェシカさん（同右端）。

は要らない、あつてはならない。世界の多くの皆さんが普通に口にするようになってしまったと思っています。

核兵器の製造・保有・使用などを禁止する核兵器禁止条約は、一二二カ国・地域が賛成して二〇一七年に成立し、批准が五〇カ国・地域に達した二一年に発効した。条約前文は「ヒバクシャ（被爆者）の苦しみと被害」に言及する。二四年九月現在、九四カ国・地域が署名しているが、核保有国や日本はしていない。

5 生きていて よかった



日本被団協結成から 50 年の 2006 年、平和記念公園で語り合う阿部（左）と高野（村戸）由子さん。村戸さんは 1955 年の第 1 回原水禁世界大会で証言し、「生きていてよかった」の言葉が思わず口を突いて出た。阿部の詩の一節とともに 2 人の思いは日本被団協の結成大会宣言に盛り込まれた。高野さんは 2022 年 9 月 21 日に 90 歳で死去。（中国新聞撮影・提供）

阿部静子は二〇二四年二月二日に九七歳となった。胃がんや転移も乗り越えて広島市南区の老人ホーム「八景園」で暮らしている。五階の自室で新聞を毎日読み、年に一〇〇通を超す手紙を送る。体力はめっきり衰えたが、ヒロシマをめぐる記憶は鮮明だ。

―広島平和文化センターが委嘱する「被爆体験証言者」を続けていたのに二〇一三年に退いています。八六歳だったとはいえ、何があったのでしょうか。

阿部 一番は胃がんとなったからです。かかりつけ医の先生に「緊急入院です」と言われた時は、三日後に証言の約束をしておりました。センターに電話をしたら、応対に出た職員さんがご苦労さまの一言もなく、代わりはいくらでもいますからという言葉でした。それで心が冷えたわけです。私は平和文化センターの道具だったんだなあと思いました。先生が広島大の出身だったので大学病院を紹介

していただき、放射線治療と抗がん剤で診てもらいました。三カ月くらいかかったでしょうか。退院してからは隣に住む次男一家に支えられてしばらくは自宅です暮らししておりました。

―退院後にセンターから証言者としての求めはなかったのですか。

阿部 海田町の端から通うのは、自宅から出て、芸陽バスで四〇分あまりかけてバスセンターに着いて、そこから徒歩で参ります。原爆資料館や（国立広島原爆死没者）追悼平和祈念館で約一時間証言して、また同じ道を帰る。とても体力が持ちません。根気もなくなりました。辞めるかどうか、お尋ねもなかったんですが、自分で決めて辞めました。すっぱりと引退しました。

―被爆地広島が二〇一六年五月二七日に受ける原爆を投じた米国の現職大統領の

初訪問、当時のバラク・オバマ大統領が来日する前から、トルーマン元大統領と会ったこともある被爆者として、新聞・放送局から取材を求められていました。どんな思いを抱かれていたのか、あらためておうかがいします。

阿部 なんか私らの味方が来てくださると親近感を持っていました。「オバマさん、ようこそ広島へ」という気持ちでお迎えしました。私は出かける体力はないので、当日は自宅にNHKのテレビ中継の方たちが来られました。原爆慰霊碑に献花をする姿を見て、好意的に受け止めた返事をいたしました。もう少し原爆資料館を時間を割いて見ていただきたかった、という気持ちもありましたね。まあ、ありふれた意見ではあります。

―メディアを通じての証言を見なくなったと思っていたら、こんな記事を見つけました。「八景園」の入居者一三人が南区の仁保公民館で歌声を披露した「笑顔

も奏でるコーラス隊」との見出し記事で、「また外部の人に歌を聞かせたい」と阿部さんの談話が載っていました（中国新聞二〇一八年一月一三日付）。

阿部 この「八景園」へはコーラス隊で歌った前の年に入ったように思います（二〇一七年七月二七日入居）。ここへ来ても（南区霞にある）広島大病院へ五〇回くらい通いました。がんが十二指腸に転移したと言われて。今度は抗がん剤だけで治療してもらいました。

―被爆者にがんの発症率が高いのは放射線後障害研究からもよく言われていますが、不安は大きかったのでは。

阿部 もうおしまいじやろうと思いました。でも、子どもらやお友達から「胃がんの人は皆、元気になっているよ」と言われ、そうかもと思って。私は生き死には仏さまにお任せしております。お任せですから心配はしておりません。うちに

いたときは一冬に三回は大風邪をひいてりました。子どもらが慌てるようなこともあったんです。ここに来てからは風邪をひいていません。食事の栄養バランスがいいんです。おいしいことはありませんが。介護士さんも、いい人ばかり。ありがたいと思いながら過ごさせてもらっております。

三人の子どもたちはよくしてくれます。滋賀県にいる長男は年に五回は来てくれます。猛暑続きのこの前も帰って来て、皆さん（聞き書き編者）へ渡してくれと紙をね、置いていきました。参考にしてやってください。「国会請願」に連れて行った次男は夫婦でよく来てくれます。私が出たテレビ番組も録画して残してくれとります。娘は一週間に二回は来て、あれやこれや世話をやいてくれます。この前は「お母さん、出る杭は打たれる。ここではおとなしくして」と言うので「どうして」と聞くと、「またテレビや新聞に出ると」と申しました。親子で話し合いました。「ほとぼしる、やむにやまれぬ気持ち伝える。こういう仕方で生きるの

が私の宿命よ」と言いました。

「広島・長崎世界平和巡礼」六〇年の二〇二四年四月、バーバラ・レイノルズらが創設したワールド・フレンドシップ・センター(WFC)が主催した記念イベントで証言し、メディアは被爆者阿部静子に再び注目する。「八景園」の自室カレンダーは夏にかけて、ミニ特集番組をつくるNHKや広島テレビ、各新聞・通信社の訪問取材予定日で埋まった。八月六日は「被爆者の声を世界へ」と題しWFCが中区のJMSアステールプラザ大広間で開いた講演会へ出向いた。

―八月六日に被爆体験を一〇数年ぶりに海外からの若い人を含めて大勢の前で証言されました。やはり気持ちは違いましたか。

阿部 違います。原爆の日に広島へ集まる人は、反核への熱い気持ちを持ってお



1990年代前半、安芸郡海田町砂走の自宅にそろった3人の子らと。右から長女の千恵子、阿部、長男の年雄、次男の比路志夫妻。前列の子どもは次男の娘。

られます。とても温かいまなざし
で愛^めでてください。証言した私が
元気をいただきましたよ。英語の
人たちには通訳がありました、が、
一時間ちよつとは十分にお話し
できず、生煮えのようで申し訳な
かったです。

―会場には、小学生のひ孫さんら
も来ていましたね。

阿部 はい。うちの嫁さん（次男
妻）が「夏休みですし、孫を連れ

てうかがあります。話は分からなくても、核兵器反対の運動を続けてきたお母さんの姿をまなこに残してやりたい」と言ってくれて。一番前に座って聞いてくれたのもうれしかったですよ。中学生のひ孫は塾で忙しいんですが、小学校の授業で原爆のことを聞いて、「おばあちゃんがおおやけどし、証言活動をしている」と手を挙げたそうです。先生が「見たい」とおっしゃり、次男が編集した私の証言映像を学校へ持っていくと、隣の教室もその隣の教室でも見てくださった。原爆の傷は自慢にはならんのに、ひ孫は恥ずかしいとは思わず、私が生き延びてくれたからと感謝の思いも次男夫婦に話したそうです。それを聞いて私は泣きました（阿部のひ孫は一二人を数える）。

こうして長生きしているのも、やっぱり亡くなった人たちが守ってくださり、「もつと伝えよう、伝えよう」と後押ししてくださったから、今があると思っています。証言の機会をいただき、一言、一言疎かにできないと思って、この前の

W F C の会へも出させていただきました。

―被爆体験を次世代が受け継ぎ伝える「被爆体験伝承者」の養成が続いています
が、どう見ておられますか。

阿部 伝承者が伝えようとする心は尊いし、ありがたいと思っています。被爆者を思われる姿勢は尊敬し感謝しとるんですが、われわれのような熱意までは伝わらないかという心配もしております。

広島市は「被爆体験証言者」の体験や思いを伝える「被爆体験伝承者」の養成を二〇一二年度に開始。希望者は証言者から聞いた体験を原稿にまとめるなど二年間の研修を積み、平和文化センターの委嘱により原爆資料館での定時講話や外部の依頼に応じて講話をしている。二四年四月現在二二六人が登録。

阿部 普通の涙じゃないですよ。この顔でね、生きていこうと思ったら。九七歳まで生きてしまったけれど死んでも治りそうにありません。原爆の傷もつてね、死ぬまでこの顔でね、生きるというのは、自分がこういう傷で生きてみないと分かりません。だから、誰にも私のようになってほしくないと願い、証言をしてきました。（原爆資料館長だった）高橋（昭博）さんも「話しても分からんよ、でも話さんと分からん」とよくおっしゃっていました。原爆のことを伝えるというのは本当に難しいですよ。

―被爆者は、原水爆の禁止から核兵器廃絶まで国家の側でなく被害に遭う人間の側に立って訴えてきました。日本被団協の初代事務局長を務めた藤居平一さんは「救われる者が救う」と直筆ノートに書き残していました（広島県立文書館所蔵）。しかし、核兵器は世界に広がり、使用の可能性を公然と口にする指導者、

国家も続く現実世界をどう思っていますか。

阿部 広島への原子爆弾は今と比べると幼稚だったといわれていますが、あの中にいた者にとっては、地獄でもこんなことはないだろうと思うくらいのものでした。原爆よりもっと精巧、強力でできている核兵器がこの世にある、使うというのは被爆者としてとても許すことはできません。ぜひぜひ、やめてほしい。核兵器がひとたび使われたら人類滅亡です。核兵器に関心がなかったり、その力を頼ったりする人は、自分が人類として思っておられないのでは、他人ごとだと思っておられるのではないでしょうか。原爆や核兵器の被害を自分ごと、自分の親とか子や孫に例えて受け止めていただいたら、もっと熱心に取り組んでいただけるんじゃないか、平和な世の中になると思っております。

—この前、被爆者は「たくさん種のまいた」とおっしゃいました（154頁参照）。

種は花を咲かせる、実をつけると信じておられますか。

阿部 はい。あの頃の平和大会（原水禁世界大会）から八月六日に広島へ集まる人たちや、修学旅行で来られ、私どもの証言を聞いてくださる方たちを見て、そう思っています。この前は富山県高岡市から、リタイアされたんですけれど中学校の先生が私を捜して訪ねてこられました。富山からの学校にはよく証言をさせてもらいました。その方が言われるには、ご主人が難病になられた時に私が励ましの手紙を送ったそうです。忘れておりました。「それがうれしくて学校を辞めずに働き続けて、夫にも優しくして見送りました」とお礼に来られました。私もうれしかったですよ。人に優しくするのが、やっぱり平和の一粒じゃないでしょうかね。心からそう思っております。

―長期間にわたってお話をうかがわせていただき、本当にありがとうございます。

今回の証言をまとめ、図書館などへ贈る本の副題は、あの詩の一節から「悲しみに苦しみに 生きていてよかった」を取りたいと考えています。

阿部 ここでは金曜日に二週間に一回の健診があるんです。この間、（近くにある）厚生病院の院長さんが私に「阿部さんは今まで生きてきた中でいつが幸せですか」という質問があったので、「今です」と答えました。そしたら院長さんが「そう言われるだろうと私も思っていた」とおっしゃいました。私の生き方が皆さんに幸せに見えるんじゃないかと思ってね、感謝しております。皆さんに私の被爆体験や生き方を知っていただけたら、ありがたいです。

二〇二四年のノーベル平和賞を日本原水爆被害者団体協議会（日本被団協）に授与すると一〇月一日、ノルウェーのノーベル賞委員会が発表した。「核兵器のない世界を実現するための努力」「核兵器が二度と使われてはならないことを証言

を通じて示してきた」。阿部静子をあらためて「八景園」に訪ねた。

阿部 うれしかったです。今までのことを思い出して涙が出ました。部屋で泣きました。被団協がいただいたということは、功績が認められたんでしょうが、これからの責任も重いなあと思いました。賞は、やっぱり先人のおかげです。家業をなげうって私どものために立ち上げられた藤居（平一）先生、「アカ」呼ばわりされながら被爆者のお世話をされた桧垣（益人）先生、運動を引っ張って核兵器の廃絶を訴えられた森滝（市郎）先生、この前亡くなられた、ほら、あの、坪井（直）さん、皆さんのご苦勞を思い出しました。

―阿部さんは、まさに先人と一緒に頑張ってこられた一人じゃないですか。

阿部 ええ、まあ、私は大した働きはしておりません。こんな顔で生きてきたの

で自分に自信がありません。だからね、被爆者として喜ぶばかりじゃなしに、責任を考えました。大きな賞ですから。

――一日のノーベル平和賞発表はどのように知りましたか。

阿部 夕方この部屋でNHKのテレビ・ニュースを見ていたら、今の理事長さんが「本当か？」と頬をつねって喜ばれているのを見ました（広島県被団協の箕牧智之理事長が受賞に備えて広島市政記者室で高校生平和大使三人と待機していた）。私も被団協を引退する前は、事務所（中区大手町の県被団協が入る平和会館）で発表を待ったことがあります。二〇年前くらいだったでしょうか。たくさんのカメラに囲われましたが、池田（精子）さんらと肩を落として帰ったことを覚えております。ノーベル平和賞は長年の念願でした（池田精子は二〇二四年二月二〇日に九二歳で死去）。

日本被団協は「ふたたび被爆者をつくるな」と一九八五年、被爆者代表団を国連常任理事国でもある核保有五力国に派遣し（阿部静子はフランスへの代表団の一人）、同年に初めてノーベル平和賞に推される。それ以降も推薦が続き、被爆六〇年の二〇〇五年には期待が高まったが、国際原子力機関（IAEA）とモハメド・エルバラダイ事務局長が、二〇一七年には核兵器禁止条約の制定に貢献した核兵器廃絶国際キャンペーン（ICAN）が受賞した。

―受賞の知らせの後は、お祝いの電話で大変だったのでは。

阿部 あくる日は、ここの皆さんが集まる部屋へ行くと「おめでとう」「よかったね」と声をかけてくださいました。お年を召されていても私の活動をご存じでした。長男の年雄は滋賀県におりますが、「方々からお祝いの言葉をいただいた」と

連絡してきました。母親が原爆の証言活動をしてきたことを知っておられたんです。海田町に住む次男の比路志も朝にお祝いの電話をくれました。南区にいる娘の千恵子はいつも一人で来るんですが婿（長女の夫）も一緒にねぎらつてくれました。あれらも、いつか申しましたように、子どもの頃は私が（ケロイドの）赤い顔で授業参観に行くので肩身の狭い思いをしましたからねえ。喜んでくれました。力強い声で心を込めてしよられるのをテレビでこの前も見た（「被爆体験証言者」の）梶本淑子さんからはお手紙をいただきました。マスコミの方も次々来られて。夕べ（一〇月一六日）は、この部屋で転んでしまい、夜勤の人がドーンという音で気づいてくれてベッドに引き上げてもらいました。大したことになりますよかったですよ。

―受賞発表を機に「責任を考えた」と言われましたが、これからも果たそうとあ

らためて誓われたのでしょうか。

阿部 もう九七歳です。覚悟をしながら一日一日を、舟を漕ぐように生きとりま
す。自分で責任を果たせないから悔しいんです。活動に打ち込もうにもできんか
ら悲しいんです。被爆者の心をいかに若い人たちに託すか。年寄りの被爆者も力
を奮い起こす。それが責任だと思っています。個人としてはささやかであつても
伝えていこうと思つとります。昨日も新聞社の若い記者さんが被団協のことを一
から聞いてくださいました。

―広島県内最大の会員数だった海田町原爆被害者会の解散を会長として決断する
に当たって、ご自身のお子さんを含めて「被爆二世」に背負わせる気持ちはな
いと話されました。日本被団協の受賞でお気持ちは変わりましたか。

阿部 そこが矛盾しとるところです。原爆でむごい目に遭い、私は心も傷ついて

泣いて泣いて暮らしました。「被爆二世」ということになる遺伝とか、そういうイメージが絡んで、その子どもたちも傷つきます。利己的でしょうか。被爆が原因する差別やいじめは自分らだけで十分だと思っています。

一九五六年結成の日本被団協は、かつては四七都道府県に加盟団体があったが、被爆者の平均年齢が八五歳を越す中で、二〇二二年度に石川県原爆被災者の会が解散するなど現在一一団体が解散・休止にある。広島県でも活動を終える団体が増えて県被団協を構成するのは約三〇団体に減っている。

―広島県被団協から日本被団協の結成大会に参加された一人として、「被爆者のよりどころ」とおっしゃられた組織の今後をどう見えていますか。

阿部 被爆者はどんどんいなくなっても（二〇二四年七月現在、全国の被爆者は

一〇万六八二五人、うち広島県内は五万一二七五人となった）、被爆した事実、原爆で数え切れない人が死んだ、苦しんだ事実は変わりません。私は悲しみのどん底にいたとき、あの原水禁世界大会で広島へ集まった人たちに慰められ、励まされました。人としての心を持った方たちです。被団協の活動は、核兵器のない、戦争のない世界に向けて行動する有志を入れてやっていただきたいという願望を持っております。このノーベル平和賞で燃え上がる若い人たちがいます。信じております。私がいるこの部屋から声援を送りたいと思っています。

阿部静子略年譜

（この略年譜は、本人や家族の提供記録や、被爆者運動・原水爆禁止運動の各関係資料、中国新聞記事などを基に作成したものである）

一九二七（昭和二）年 当歳

広島県安芸郡奥海田村（現在の海田町）に、農業大力万吉、ツ子の五女として二月二二日に生まれる。兄三人、姉四人の八人きょうだいの末っ子、七歳違いの四女は早世していた。

一九三三（昭和八）年 六歳

奥海田小学校（海田東小学校）に入学。

一九三九（昭和一四）年 一二歳

奥海田小学校尋常科を卒業し、広島市西白島町の安田高等女学校（安田女子中・高校）に入学。山陽本線安芸中野駅から列車通学を続ける。

一九四一（昭和一六）年 一四歳

日本が一二月八日、米英と開戦。

一九四三（昭和一八）年 一六歳

安田高等女学校を卒業し、広島市国泰寺町にあった「土井田高等洋裁女学校」に入学。
阿部三郎と結婚。九歳年上の三郎は山形県最上川流域の北村山郡亀井田村（現在の大石田町）の出身で大阪で育つ。満州牡丹江省（現在の中国黒竜江省）に駐屯する第八師団野砲第八連隊第九中隊に所属する中尉だった。一時帰国して安芸郡矢野町の親族を訪ねたことから見合いとなった。夫の部隊復帰で新婚生活は一週間に。

一九四四年（昭和一九）年 一七歳

実家近く安芸郡中野村の借家に阿部三郎の母ナエと住み、海田市町（海田町）にあった第一海軍航空廠で働く。三郎が中隊長だった第九中隊は一月に南方派遣の命令を受けて三月、西太平洋サイパン島経由でカロリン諸島エンダービー島に上陸。連絡は途絶える。

一九四五（昭和二〇）年 一八歳

八月六日、広島市の第六次建物疎開作業に伴い「中野村国民義勇隊」として京橋川西側の平塚町（中区東平塚町、鶴見町などの一帯）へ出動して原爆に遭い、顔や腕に大やけどを負って安芸郡船越町の日本製鋼所広島製作所まで避難した。九日、父万吉が同製作所で見つけてリヤカーで連れ帰る。

十二月三〇日 阿部三郎が静子の実家を目指して復員。

一九四六（昭和二一）年 一九歳

広島市宇品町の日本医療団宇品病院（県立広島病院）へ両親の支援で半年間入院し、右手指への植皮手術を受ける。

長男年雄を出産。連合国軍総司令部（GHQ）の公職追放指令から、除隊時は大尉だった三郎は、静子実家の大力の親族が営む材木店で働く。

一九四七（昭和二二）年 二〇歳

奥海田村に進駐軍通訳の長兄が入手した材木で自宅を建てる。

一九四九(昭和二四)年 二二歳

次男比路志を出産。

一九五二(昭和二七)年 二五歳

「原爆被害者の会」が八月一〇日発足。「原爆一号」と呼ばれた吉川清が妻生美と原爆ドームそばで営む土産物店で開く集まりを訪ねるようになる。

奥海田村が東海田町となる。

一九五三年(昭和二八)年 二六歳

『原爆に生きて』を編さんする山代巴へ自らの体験をつづった手紙を送り、「えり子」という匿名の「友の手紙」として収録される。三一書房から六月二五日発行。

一九五四(昭和二九)年 二七歳

長女千恵子を出産。

一九五五(昭和三十)年 二八歳

八月六日、第一回原水爆禁止世界大会が広島市の平和記念公園にあった市公会堂で開幕し、参加する。九月一九日、原水爆禁止日本協議会が発足。

三郎が県職員に採用される。

一九五六(昭和三十一年) 二九歳

三月一九日 広島県原水協幹事の藤居平一を団長に広島の新原爆被害者代表団が治療費

の国庫負担や原水爆実験禁止を求めて広島駅を出発。阿部は次男の手を引いて急行「安芸」に乗車した。翌二〇日、長崎、宮城、長野県などの代表とともに衆参両院議長に請願。二一日、広島の国会請願団は地元出身の元大蔵大臣・池田勇人を新宿区の自宅に訪ねる。続いて、首相鳩山一郎邸で妻薫と面会し、阿部が代表して願いのあいさつを述べる。

五月二七日 広島県原爆被害者団体協議会の結成総会が基町の広島YMCA講堂で開

かれ、県下各団体約六〇〇〇人の代表者約一二〇人、長崎八人、愛媛一人が参加。

七月一日

「原・水爆禁止の願いこめ」「被害者の作詞した歌」と阿部が国会請願から帰途の列車内で作った詩「悲しみに苦しみに」が中国新聞で紹介される。

七月一八日

安芸郡原爆被害者団体連合会が広島市に続いて結成。原爆で妻子を失った桧垣益人（東海田町）が会長に就き、副会長に伊藤サカエ（矢野町）ら。安

七月二四日

芸郡内の原爆被害者は四六〇〇人を超え、二八〇〇人が新会員として入会。海田町原爆被害者会が設立。桧垣が一九五四年ごろから町内を訪ね歩いて結成を説き、阿部も協力して回った。設立時の会員は二三四人。一九六九年には一五〇〇人となる。

八月七日

広島県原爆被害者大会が市公会堂で開かれ、約五〇〇人が参加。阿部が「原爆被害者に対する国家補償」などの提案文を読み上げ、「私たち生き残っ

たものが、強く生きぬくために、お互いに、助け合い、手を握ってやりましょう」と呼びかける。

八月一〇日

日本原水爆被害者団体協議会が結成。第二回原水禁世界大会があつた長崎国際文化会館に約八〇〇人が集まる。「悲しみに苦しみに」が会場で歌われる。

十一月一九日

「広島のうたごえ」大会が基町の児童文化会館で開かれ、「悲しみに苦しみに」が歌われる。作曲は広島合唱団を指導していた村中好穂。

海田市町と東海田町が合併して海田町に。

一九五七（昭和三二）年 三〇歳

原子爆弾被爆者の医療等に関する法律（原爆医療法）が四月一日施行。

一九六〇（昭和三五）年 三三歳

被爆者健康手帳を広島県から交付される。

一九六三（昭和三八）年 三六歳

原水爆禁止運動が「いかなる国の核実験にも反対する」かの賛否をめぐって社会党と共産党との路線対立が激しくなり、日本原水協は分裂する。

一九六四（昭和三九）年 三七歳

一月一六日 広島「憩いの家」を運営する文筆家田辺耕一郎の推薦から、バーバラ・レ

イノルズが提唱した「広島・長崎世界平和巡礼」の一員に選ばれる。

四月一六日 世界平和巡礼団（団長・松本卓夫・静岡英和女学院院长Ⅱ元広島女学院院长）の

四〇人が急行「安芸」で広島駅を出発。阿部は大学ノート表紙に「旅日記」

と書き、「私の全力をつくし、世界の人々に原爆のおそろしさを語り、空しく苦しみ亡くなった人達の平和への願いを代弁する決意である」と巡礼の日々を欠かさずつけ始める。

四月二一日 平和巡礼団が羽田空港からホノルルへ飛び立つ。

四月二二日 (以下、現地時間) ホノルル青年会議所で講演会。翌日ホノルルを出発

し、ロサンゼルスへ。

四月二四日 松本らがテレビ人気番組「スチーブ・アレン・ショー」に出演。二六日に

は、リンディー・オペラ劇場で一般集会。入場料は一人二五^{ドル}、五〇〇人以上が集まる。

四月二八日 団員がロサンゼルス空港に集合。北、中、南の三コースに分かれる。

四月三〇日 松本、阿部、団員で同行取材の中国新聞社社会部次長長満井晟らがカリフォ

ルニア州都サクラメントを訪れ、副知事と面会。地元紙「サクラメント・ユニオン」が阿部の被爆体験を五月一日付で報じる。

五月三日 阿部ら南コースは、サンフランシスコからダラスを経てテキサス州に散らばり、四日夜ミズーリ州カンザスシティへ。

五月五日 原爆投下時の大統領、ハリー・トルーマンがミズーリ州インディペンデン

五月一〇日

スの記念図書館で団長の松本と会見。阿部、廿日市高教諭の森下弘、長崎のケースワーカー高原弘子ら七人と通訳の四人も立ち会う。元大統領トルーマンは「双方で五〇万人以上の死者を出さないよう戦争を終結させるのが目的だった」と投下の断を下した理由を述べた。阿部は「実のないあつけない面会なり」と「旅日記」に書き留める。

ミズーリ州セントルイスで市長招待の歓迎会が開かれ、阿部が約一五〇人の前で被爆体験を語る。

五月二八日

世界平和巡礼団が首都ワシントン入り。団長の松本は、上下両院原子力合同委員会でパストーレ委員長らと会見。部分的核実験禁止条約締結への米国の努力をたたえ、原水爆禁止を要望。「原子力は人類の破滅の方向に使うのではなく、人類の繁栄のための平和利用に努力してほしい」。通訳一人を含む団員四二人の航空券団体割引が合致しないとする航空会社か

らのクレームで財政問題が表面化する。

六月四日

世界平和巡礼団がニューヨークに到着。

六月七日

英国ロンドンやベルギー・ブリュッセルの支援組織から招請があつた第一陣二〇人がロンドンへ出発。

六月八日

ニューヨークのカネギーホールで最終講演会を開き、欧州への第二陣となつた阿部は着物を着て会場へ。入場料は一ドル。コメディアンのディック・グレゴリーも賛助講演し、聴衆一二〇〇人からの募金は五〇〇〇ドル(当時一八〇万円)が集まる。

六月一日

阿部ら八人が国連にウ・タント事務総長を訪れ、原爆被爆の影響調査を要望。

六月二日

残留組二〇人がニューヨークを出発。翌日フランス・パリに入る。

六月六日

科学者グループが受け入れ、パリの大劇場シルク・ディバイルに集まつた

六月一七日

聴衆に、阿部や広島市の幼稚園長大内洋ら五人が被爆者の立場から訴える。ベルギー国王からブリュッセルに招かれた一〇人を除く一行は西ドイツへ。一八日ドイツ民主共和国の首都東ベルリンに入り、一九日には、ナチスが郊外に設けたザクセンハウゼン強制収容所を見学。阿部は「1人1人が1人1人の人間の手と心によって殺された事実には心から怒りを感じる」と「旅日記」に書き残す。

六月二六日

巡礼団の一行四〇人が東ベルリンからの急行列車でモスクワに到着。二九日ゴーリキー中央公園での集会で広島女学院大教授の庄野直美ら四人が話す。

六月三〇日

モスクワからハバロフスクへ空路にて出発。

七月二日

一行四〇人がナホトカから日ソ定期船「オルジョニキーゼ号」に乗り込む。二等客室だったが一等客船食堂やロビーを使える便宜を受けた。

七月四日
横浜港に帰着。

七月五日
巡礼団の二人が急行「安芸」で広島へ戻り、原爆慰霊碑に黙とうをささ

げる。翌六日は平和記念館での「市民への帰国報告集会」に臨む。団長の松本は計八カ国、約一五〇都市への巡礼は「平和のためのタネまきだった。今後はその成長と収穫を目指し、地に着いた運動を繰り広げなければなら
ない」と訴え、阿部ら団員も各自の考えを発表。

八月五日
原水禁運動の分裂から社会党・総評系の広島・長崎・静岡原水爆被災三県

連絡会議が広島県立体育館で開いた原水禁大会の開会総会で、広島県原水協代表委員森滝市郎の基調講演に続き、阿部による「被爆者の訴え」など
三つの特別報告。

一九六八（昭和四三）年 四一歳

原子爆弾被爆者に対する特別措置に関する法律（原爆特別措置法）が九月一日施行。

一九七〇（昭和四五）年 四三歳

海田町原爆被害者会が編さんした『原爆体験を語る』に「再び戦争があつてはならぬ」を寄稿。

一九七五（昭和五〇）年 四八歳

海田町原爆被害者会が編さんした『被爆三十年の歩み』に「第一回国会請願の思い出」を寄稿。

一九八〇（昭和五五）年 五三歳

世界平和巡礼実行委員長も務めた外科医原田東岷の執刀で、ひきつっていた右手は振って歩けるまでになり、口のゆがみが楽になる。

一九八三（昭和五八）年 五六歳

原水禁の原水禁大会が八月四日、県立体育館で始まり、一一カ国五一人の代表を含む約八〇〇〇人が参加。阿部が「世界のどの国でも再び核の犠牲者を出してはならない」と訴える。

一九八五（昭和六〇）年 五八歳

三月二日 全国規模の反核集会「⁸⁵年・平和のためのヒロシマ集会」が市内七会場で行われ、平和記念公園に集まった約五〇〇〇人の聴衆を前に、阿部は「被爆者が生きていてよかったと思える時は、援護法が制定され核兵器が廃絶された時」と訴える。

七月二九日 原爆被爆者の援護事業に功労のあった人への厚生大臣表彰九二人が発表され、阿部や広島県被団協事務局長を前年に退いた桧垣らが選ばれる。

一〇月一九日 日本被団協の被爆者代表団がフランスへ出発。被爆者中央相談所理事長の肥田舜太郎を団長に阿部ら五人。核兵器廃棄の国際条約締結や政府首脳の被爆地訪問を求めたミッテラン大統領宛ての要請書を携える。

一九八六（昭和六一）年 五九歳

吉川清が安芸区の国立療養所畑賀病院で一月二五日、七四歳で死去。葬儀には広島県被団

協理市長の森滝市郎ら約六〇人が参列。阿部は「原爆被害者の会をつくったところは『戦争はいけん、原爆はいけん』と言うだけで『アカ』と呼ばれた。吉川さんはそんな声にひるむことなく、私らにとって大きな励みだった」としのぶ。

一九八七(昭和六二)年 六〇歳

国連軍縮フェローシップでソ連、インドなど二〇カ国二〇人が広島市を訪れ、阿部ら被爆者二人が証言。

一九八八(昭和六三)年 六一歳

広島市の財団広島平和文化センターが一月に派遣した初の市民平和友好訪中団で中国を一週間訪れ、南京大学や上海の中学校で被爆体験を語る。

一九八九(平成元)年 六二歳

広島平和文化センターの「被爆体験講話講師」に四月から加わる。当時は一二人。第二回世界平和連帯都市市長会議が八月五日、平和記念公園の広島国際会議場で開かれ、代表者

ら約二〇〇人が被爆体験を聞く懇談会でも証言する。

一九九一(平成三)年 六四歳

第二回国連軍縮京都会議に参加した二五カ国の軍縮担当者らが平和文化センター事業部長の高橋昭博や阿部から被爆体験を聞く。夫三郎の病状から講話講師を退く。

一九九二(平成四)年 六五歳

阿部三郎が八月三〇日、七三歳で死去。

一九九五(平成七)年 六八歳

原爆医療法と原爆特別措置法を一本化した被爆者援護法が七月一日施行。海田町原爆被害者会の会長に就き、二〇〇七年の解散時まで続ける。

一九九七(平成九)年 七〇歳

日本被団協初代事務局長を担った藤居平一(一九九六年に八〇歳で死去)の追想集『人間銘木』に「火の玉の救世主」と題した追悼文を寄稿。

一九九九年(平成一一)年 七十二歳

広島平和文化センターの「被爆体験証言者」を委嘱される。

二〇〇三年(平成一五)年 七十六歳

広島・長崎市の「広島・長崎講座」の呼びかけに応じた早稲田大の総合講座で講師を務める。

二〇〇四年(平成一六)年 七十七歳

広島・長崎市の「児童生徒平和のつどい」で被爆直後の惨状を語る。

二〇〇五年(平成一七)年 七十八歳

被爆体験を継承し平和活動の担い手を育成する市民対象の連続講座「ヒロシマ・ピース・フォーラム」で証言。

二〇〇九年(平成二一)年 八十二歳

民族対立の内戦で荒廃したスリランカ東部の復興を担う行政官や記者ら九人に証言(二月

二二日）▽外務省が招き、原爆資料館見学を希望したアフリカ・ウガンダのサム・カハンバ・クテサ外相に証言。メモも取った外相は「医療で身体の傷は治療できても心の傷は治せない。被爆者が負った心の傷が何より印象に残った」と話す（六月六日）▽日本とイラクの外交関係樹立七〇周年を記念し外務省が招いた、バリ外相は阿部の体験を聞いて「軍拡競争が起きている中東にも、平和を求める人はたくさんいる」（六月二〇日）

二〇一〇（平成二二）年 八三歳

トルコの駐日大使が原爆資料館を見学し、阿部が証言をする（一月三十一日）▽東ティモールのジョゼ・ラモス・ホルタ大統領が原爆慰霊碑に献花し、阿部の証言を聞く（三月十九日）▽イタリア・ローマ市長と高校生一〇人が阿部の体験を聞く（四月一二日）▽エクアドルのラファエル・コレア大統領が資料館を見学。外国元首で初めて国立広島原爆死没者追悼平和祈念館を訪れ、阿部の証言に耳を傾ける（九月七日）▽元スイス大統領で国連総会議長のジョゼフ・ダイスに、日本政府の「非核特使」として阿部と長崎市の被爆者が証

言。「悲惨な体験をしたにもかかわらず、二人は広島、長崎を離れず証言を続けている。

平和への強いメッセージだ」と敬意を表す（二〇月二八日）

二〇一（平成二三）年 八四歳

アフリカ北東部ジブチの在ジュネーブ国際機関代表部大使に証言（一月一七日）▽原爆資料館が観光客を案内するタクシー運転手やバスガイドを対象とする研修会の参加者五三人に体験を語る（三月一〇日）▽南米ウルグアイの工業エネルギー鉱業相に証言。「被爆者が抱える苦しみに触れることができた」（九月九日）▽衆議院の招きで来日し広島訪問を希望した南アフリカ国民議会（下院）の議長に証言（十一月一三日）。

二〇一三（平成二五）年 八六歳

胃がんが見つかり、広島平和文化センターの「被爆体験証言者」を四月に退く。

二〇一六（平成二八）年 八九歳

広島県被団協の結成六〇周年記念式典で功労者として一月二七日表彰される。「年々仲間

が減って切迫した気持ちです。せめて私が証言を続けたいけど、体がついてこなくて…。さまざまな地域の活動が運動の力の源です」

二〇一七(平成二九)年 九〇歳

広島市南区の介護付き有料老人ホーム「広島八景園」へ入居。

二〇二四(令和六)年 九七歳

「広島・長崎世界平和巡礼 60 周年記念パネル展」(NPO 法人ワールド・フрендシップ・センター主催) 期間中の四月一三日、ギャラリートークに臨む。夏にかけて広島のみならず東京からのメディア取材に応じる。同センターが八月六日、中区で開いた講演会で被爆体験を海外の若者らにも証言。一〇月一日、日本被団協がノーベル平和賞に選ばれたことを「八景園」自室で夕方見ていたNHKニュース番組で知る。

あとがき

『被爆者 阿部静子は語る』は、ご本人の惜しめない証言と協力で成り立った。九七歳となった母の体調に心を砕く息子・娘さんの理解もあって半年間に及んだ聞き取りは可能となった。あらためて感謝を申し上げたい。

本書の聞き取りは、「ヒロシマ通信」研究会（代表・宇吹暁元広島女学院大教授）メンバーの菊楽忍（元原爆資料館職員）、菊楽肇（元広島市職員）、西本雅実（元中国新聞社記者）が当たった。

成立に至る経緯と意図をこの場を借りて説明する。

研究会は、宇吹が著した『原爆手記掲載図書・雑誌総目録 1945―1995』（三六七七冊の書誌情報を収録して一九九九年発行）を基に、それ以降も続いた「原爆手記」を含めて被爆七〇年の翌二〇一六年、「ヒロシマ通信」という書誌

データを検索できる専用サイトを設けた (<https://hiroshima-letters.net/>)。取り組みを続けて被爆七五年の二〇二〇年末までの刊行は六一九四冊に上ることをまとめ、各書誌情報を発信している。

「原爆手記」は、人間が原爆でどうなったのか、それがどのように記憶され、伝え受け止められたのかを知る記録であり「紙碑」でもある。被爆者個人や被爆時に所属していた団体が発行元の私家版が多く、広島の公共図書館も所蔵していない書籍は珍しくない。菊楽忍は原爆資料館情報資料室でこれら手記の入手に務め、西本は原爆を巡る取材に長年携わり埋もれていた手記の掘り起こしにも当たってきた。

そうした中で、ヒロシマの歩みを知り未来をも考える上で欠かせない人物、阿部静子さんの半生をきちんと聞き取った「原爆手記」がないことに気づいた。「八景園」におられるのを聞いたが、二〇二〇年一月に国内で確認され一気に広がっ

た新型コロナウイルス感染で訪ねることはかなわなかった。

やきもきしながら時を過ごすうち、聞き取りメンバーはいずれも六五歳となり、勤務先を離れた。同時に気ままな時間を手にして、資料収集などの準備を重ね、決まり事も多い老人ホームでの暮らしの空き時間に三人そろって訪れた。

阿部さんの体力を考慮して「一回につき一時間くらいで済ませます」と申し入れていたが、ご本人の熱意から毎回二時間近くたっていた。「年には勝てません。ボケよりもすから」とおっしゃりながら、語られる話の豊かさ、記憶と言葉の力強さや鮮やかさにこちらが魅せられた。自省を込めて記すが、被爆者の体験を重んじるあまりなのか、記憶の改編を免れていない証言を裏付けもなく取り上げ「伝説」化しているのはメディアの取材者のみならず、継承しようとする人たちにも見られる。そうした定型化や惰性に陥らないようにと幾度も聞き返し、文献資料と照らした細かな質問にも向き合ってくださった。

都合一四回を数えた証言の聞き取りは録音してすべて書き起こし、背景説明を加えて再構成した。それを阿部さんに見ていただき、本書とした。勘違いがあれば、編者らの責任であることは申すまでもない。

原爆資料館や中国新聞を含む提供写真や、地名略図を入れた本書のレイアウトは、丸岡清枝（広島都市学園大学非常勤講師）が当たった。平和記念公園となった旧中島本町の慰霊祭を営む「中島観音会」の会長だった福島和男さん（二〇一八年に八六歳で死去）の手記『平和公園の下に眠る幻の中島界限』（二〇〇七年発行）や、朝鮮半島からの徴兵一期で広島へ送られて被爆した元韓国原爆被害者協会長の郭貴勲さん（二〇二二年に九八歳で死去）の手記『被爆者はどこにいても被爆者』（井下春子翻訳、二〇一五年発行）などに続いて手がけてくれた。

本書の刊行にあたっては、「被爆者阿部静子出版委員会」をつくり、公的助成を得た。

被爆八〇年となる二〇二五年、本書を手にとっていただき、原爆が人間に何を
もたらしたのか、核兵器の拡散と戦禍が続く世界にあつて、私たちは何ができる
のかを考えるきっかけにもしてほしい。被爆者阿部静子と編者や協力いただいた
関係者の切なる願いである。

（二〇二四年一二月二三日記）

編者略歴

菊楽忍

一九五八年三次市生まれ。九〇―二〇二四年広島平和記念資料館職員。同館情報資料室での各資料展を立案・担当。論文に「ヤン・レツル再考」など。

菊楽肇

一九五七年北海道帯広市生まれ。八一―二〇一八年広島市職員、二三年市文化財団を退職。『図説戦後広島市史街と暮らしの50年』などの編纂^{さん}を担当。

西本雅実

一九五六年広島市生まれ。八〇―二〇二一年中国新聞社記者。『検証ヒロシマ』『広島の復興経験を生かすために』『広島市被爆70年史』などを執筆。

被爆者 阿部静子は語る

― 悲しみに苦しみに 生きていてよかった

著 者 阿部静子＋「ヒロシマ通信」研究会

発 行 二〇二四年一月三十一日

発行所 「ヒロシマ通信」研究会

Eメール hi-fukushisho@gmail.com